グランドール戦記I ひとつの終わりと始まり

A-9

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
グランドール戦記Ⅰ　ひとつの終わりと始まり

【Ｎコード】
Ｎ２１０２Ｃ

【作者名】
Ａ－９

【あらすじ】
グランドール地方騎士団営業中。戦争もあるよ。

G492　ひとつの終わりと始まり　前編

木々の間から漏れる夜明けの光を手がかりに道ならぬ道を歩いていくと、森から抜けた。
そこは切り立った崖の上らしく、数歩先で地面が途切れて無くなっていた。そのおかげで、遥か彼方にある戦場の様子を見渡すことが出来る。
ほんの数時間前には、自分もあの場所で戦っていたのだ。

戦いの行く末はもう見えている。もう、どうすることもできない。仲間達の多くとは散り散りになってしまった。彼らは無事生き延びることができているだろうか。
同じ戦場で共に戦った仲間達の姿が脳裏に浮かんでは消えていく――。

ふと気付くと、歌を口ずさんでいた。今まさに歴史から消えようとしている、愛する祖国の歌を。

そうして彼方の地上を見つめていると、いつしか戦闘は収まっていたようだ。様子を見る限り、予想に違わない結末だったのだろう。これからは新たな歴史が始まるのである。

――いや、あの平和な国を歴史から消してしまって良いはずが無い。たとえ国が消えても、その国を愛する心はまだ残っている。その心は決して消え去ることは無いだろう。

崖の上に一人の騎士がいる。

まだ真新しい鎧を身につけた、どこか田舎臭い顔立ちだが騎士ら

しい凛とした雰囲気を持つ男だ。崖の奥の森では、彼の、もう随分と数の減ってしまった同行者達が彼を見守っている。
騎士は遥か遠くに見える母国を、涙を浮かべた目でじっと睨みつけながら呟いた。

「力が、欲しい」

＊　＊　＊

世界の中心に位置すると謳われるディストリア大陸。この大陸では他のいくつかの大陸がそうであるように幾つもの国が栄え、時に争い、ひとつの歴史を形作っていた。
そんな幾多の国の一つに、グランドール王国と呼ばれる国がある。
国が興ってより四百年を越え、五百年にも及ぼうとしている長命な王国だ。もっとも、王国の名を揺るがさない範囲内では政変、革命が幾度も起こっていたのだが。
事実、現国王チャールズ六世の父親、チャールズ五世はほんの三十年前に内乱の末に即位している。
このグランドール王国には、地方騎士団の存在という他国とは違う特徴がある。
本来騎士といえば、ある程度の血筋か、特別の功績のある者にのみ許される階級であり、いくらかの領地を持つ貴族である事をも意味しているが、この王国では騎士団を王宮騎士団と地方騎士団の二つに分け、前者を先の古典的な貴族階級、後者を資格試験による公募制の階級として騎士団の人員増加を計り、戦場に於ける民兵の存在を可能な限り排除していた。その理由は恐らく、非戦闘員であるはずの一般民が戦場では先頭に立たされる事の矛盾に気付いたか、あるいは外敵からの防御を第一に考え、地方では能力のある戦闘員としての騎士を集めたかったのか、といったところであろう。

グランドール王国王都であるグランは、北の大山脈から二日ほどの距離にある高地に位置している。
北の大山脈はこの大陸に於ける難所の一つとも言われ、そこへ踏み込んだ者は道に迷うか、足を踏み外すなどするのだろうか、生きて帰ることはほとんどない。また、吟遊詩人の歌によれば、そこはドラゴンの餌場でもあるという。
その大山脈を越え、さらに北へ進むと身長が3メートル近くもある種族――巨人族の集落があるとも言われるが、大陸自体がこの山脈によって分断されているために、山脈以北とは全くと言っていいほど交流が無い。
山脈から南、王都グランを中心とした一帯がこの国の主な領土となっている。グランを中心にした横長の楕円を描き、その上半分を山脈に添って切り取った形状がそれに近い物となる。

グランより街道に沿って南へ向かい、途中の村々で宿を借りつつ三日ほど歩くと、グラン最大の商業都市フィアンへと辿り着く。
海に面せず、港を持たないグランドールに於いては王都に近く、地方からもさほど遠くないこの土地が商売には持ってこいなのである。地方との交易の盛んさを証明するかのように、この商業都市からは街道を通って様々な地方都市へと向かうことが出来る。
自然、地方からの情報は王都へ入る前にここへと集まるため、この街では交易による商売だけでなく、冒険者ギルド等の様々な冒険者向けの施設も揃っている。そのギルド群の充実に伴って冒険者向けの武器や道具などを売り出す商人も集い、冒険者達の聖地として一層の繁栄を見せている。
資金に余裕があるか、旅路を急ぐ者であればここで馬を調達しておけば快適な旅が保証されるだろう。

商業都市フィアンから東に走る街道に一歩踏みだし、初めの分岐を南に折れ、四日ほど歩くと城壁に囲まれた一つの都市が目に入る。

この都市の名はメリアと言う。この都市からさらに南に下れば隣国フレーリアとの国境へとたどり着く。
王国歴４９２年を迎える現在、グランドール王国ははフレーリア、いや、北の大山脈以北を除く近隣諸国全てとは友好関係を結んでおり、外敵による侵略の恐怖には晒されていない。
そのためここ十五年ほどの地方騎士団の役目は大きな物で内乱の阻止、小さな物では村人の雑用手伝い程度に留まり、ある程度の資格――グランドール剣術三級の認定を受けること――さえあればほぼ誰もが入団できる事もあり、地方騎士団勤務は楽な上、運良く手柄を立てれば貴族の仲間入りが出来るおいしい仕事として激しい人気となっていた。
無論、このメリアを中心に活動しているメリア地方騎士団も例外ではなかった。

それまで只の村人に過ぎなかった一人の少年――レグラスもこの噂に踊らされたクチである。
もともと騎士ごっこが好きだった彼は、近所の道場生と喧嘩しながら日々剣の稽古を付けていたのだが、たまたまそこへ現れた道場主に筋が良いと誉められたのを良いことにこれへ師事し、グランドール剣術三級認定を受けるとすぐさま荷物をまとめてメリアへと踏み込んだのである。
だが、当然の如く同じ噂に踊らされた入団志願者は多く、メリア騎士団では異例の”入団テスト”を行っていた。
このテストは実に単純な物で、入団して半年になる先輩騎士と戦い、一定時間内にこれをうち負かすか引き分けに持ち込むことが出来れば合格という物だった。
入団半年では大した仕事もこなしておらず、剣術の腕はレグラス達志願者と大差ないという前提でのこのテストだったが、今回に限っては相手が悪かった。
レグラスはこの時、ファズという騎士に敗れ、次の入団テストま

で待たなくてはならなかったのだ。
結局、三ヶ月後の冬期募集によって彼は入団出来たのだが、後々聞いてみるとこのファズという男、貴族の息子という事で無試験合格こそしているが、その腕前たるやいずれ剣豪の名高いメリア騎士団長ロンバルトをも凌ぐのではないかと噂されているほどの手練れだという。
さらにこれは余談なのだが、レグラスがファズに敗れたあの試験の模様をこのロンバルト団長が見ていたらしく、その時合格したどの騎士よりも、不合格のレグラスは見込みがある男だったと誉めていたという噂があり、これを聞いて彼は密かに誇りに思う反面、憤慨もしていた。
あのテストでファズとさえ当たらなければ、彼はその時点で確実に騎士となっていたはずなのだ。
他の誰よりも強く、騎士らしい心を持ってテストに挑み、またそれが団長にも認められていたというのに、ファズという男のせいで3ヶ月もの時間を無駄にさせられた。そんな悔しさをバネに、レグラスは彼への復讐をいつか果たしてやろうと考え、日夜稽古を続けていた。

やがて冬も終わり、新しい春がやってきた。騎士団の春期募集テストも終わり、草木が青々と茂ってきたもののまだほんのり肌寒い季節の事だった。
「何事かと思って呼び出しに応じてみれば、これはなんだ？　決闘の真似事か？」
メリア騎士団詰め所の庭に、二人の男が対峙した。一人はレグラス。短く刈った髪に平凡な若者らしい顔つき、身長は高くも低くもない平均通りの丈だ。田舎者らしく農作業で鍛えられた体に真新しい騎士の鎧を身につけ、稽古用の木剣を構えたその目は相手を睨み付けて離さない。
呼び出された側であるもう一人の男――ファズは、身長こそレグ

ラスと大差ないが、耳までかかった長めの髪に典型的な美男子の甘いマスク、華奢にも見えるほどスマートな体に使い込まれた鎧を身につけ、一切の構えは取らずにやる気が無さそうな表情を浮かべて突っ立っている。

彼らの所属するメリア騎士団では、都市内や周辺の町などにいくつかの詰め所を持っており、これらの詰め所にはある程度の期間毎の交代制を取って詰めることになっている。

そして、二日前よりレグラスはある町の小さな詰め所をファズと古参の騎士二人と共に担当することになっていた。

「まさしく、決闘の真似事だ」

レグラスはその姿勢を変えずに言い放つ。

「随分な新入りも居たものだ。

どんな目的があるかは知らないが、仲間内で私闘を申し込むなんて、騎士道に反するとは思わないのか？」

一方のファズは気のない様子でこれに取り合おうとしない。

「己の名の為に屈辱を削ぐことは騎士道の一つの形であると信じている。

そう、入団試験の際に受けたあの屈辱、忘れはせぬ。

――ファズ殿の方こそ、決闘の申し込みを前に逃げ出すことは騎士道に反すると思われるが」

理屈は無茶苦茶であるが、レグラスは真剣であった。ここで勝てばいつかの汚名は返上され、負けたなら負けたで相手の腕に納得ができる。率直に言えば、騎士らしい口上でタテマエを並べてみたが、単に悔しさを根に持っているだけなのだ。

しかし、この機会を逃してしまえば次はいつこの好機が訪れるとも限らない。これから先何年もこの男に恨みを抱いて生きなければならないかもしれないのだ。

高貴な騎士が仲間内で恨み合っても仕方ないと判断した結果、この決闘申し込みである。

人の騎士としての決意をただのやんちゃ坊主のように扱って貰っ

ては困る。
しかし、今の一言で相手も合点がいったようだ。
「そうか、お前はあの時の……。
ならば、今度は手加減無しで戦ってみるのも面白いかもしれないな」
ファズは近くの壁に立てかけてある、レグラスのそれと同じ木剣を手に取り、横に構えた。それは、彼独特の剣術の型で、グランドール剣術や近隣諸国で使われる様々な剣術の型とはどれとも一致しない。
「新入り、始めの合図は任せる」
双方が構えた上で、立会人のいないことに気付いたファズがそう付け加える。まさか、この私闘に古参の騎士達を立ち会わせるわけにもいかない。
「ならば、この片足が踏み出されたら開始だ」
レグラスはすぐさま間合いを詰めるべくその片足を踏み出した。
その勢いで一気に詰め寄り、二人の距離が剣の間合いにまで詰まると、レグラスは両手で持った木剣を一閃させた。当然この一撃は勝負を賭けた物ではない。不意打ちで相手の防御を崩す為の誘いが必要なのだ。グランドール剣術の奥義にはいくつかのフェイント技も含まれている。それらを駆使しながら相手を段々と追いつめていくつもりだ。
しかし一方でファズは防戦一方で反撃の様子を見せない。
というのも、先の言葉とは裏腹に、ファズはこの男――自分を除いてここ数年では最も団長に賞賛された男――の腕前がいかなるものか、その攻撃に対してどれだけ耐えることが出来るかを楽しんでいたのである。
確かに、レグラスという男の剣はなかなかのもので、教科書通りの型から、おそらく独自に身につけたであろう技までを見事に繰り出している。最初は相手の攻撃を受け流すことを楽しんでいたファズであったが、やがて打ち合いがしばらく続くとある事実に気が付

いた。
――相手の剣を防ぐことは容易い。が、相手に討ち入る隙がほとんど無いのだ。
ファズがもしグランドール剣術の使い手であったならばこの試合は引き分けに終わっただろう。
この、王国の名を冠した剣術を用いた戦いに於いては、レグラスの剣さばきは最強と言っても良かった。
――だが。
「新入り。団長の言うとおり、お前の腕前は普通じゃないな」
ファズはその腕にある木剣を泳がせた。言葉通り、木剣は泳ぐように動き、レグラスの剣を絡め取ると、その胸板の前に剣先を突き付けて動きを止めた。
団長やその知り合いの剣術研究家の類に言わせても、剣が蛇のように動くこの型は今までに類を見ないものだという。
数秒そのまま静止し、相手に反撃の余地が無いことを確認すると、ファズは相手の胸に突き付けた木剣をさっと引いて傍に放り投げ、呆然としているレグラスに向かって言った。
「――だが、グランドール以外の剣術にも触れておくことが大切だと、俺は思う」
思い当たる節があったのか、レグラスはその言葉にはっとする。
彼は子供の頃からこの剣を習う道場生との対決を繰り返してきた為、グランドール剣術と呼ばれるそれ以外の剣術という物は名前こそ聞いても見たことは無かったのだ。
「今の地方騎士団の中堅程度でなら、このままでも十分通用するだろう。
だが、王宮騎士団や近衛騎士団の騎士達は誰もが独自の家流を獲得しているような連中だ。
――それ以前に、いざ実戦になった時には敵国の騎士はもちろん、ゴブリンだってグランドールの剣技は使わない」
一通りの講義を終えて一息ついた後、付け加える。

「手始めに、俺の剣の稽古にでも付き合って研究してみると良い。
お前のような奴がいれば俺の稽古にも一段と身が入る気がするよ」
そしてファズはもう用は終わったと言わんばかりに回れ右をして、詰め所の中へと帰っていった。
レグラスはその場で立ちつくしていた。
騎士の型ばかりを真似ていた自分と、ファズとが根本的に違っていたことを思い知らされたのだ。
二人の間では田舎育ちの騎士気取りと貴族の騎士というだけでは決してない、高い壁が感じられる。
決闘前には、この決闘に負けたら負けたで諦めようと思っていたレグラスだったが、今はまったく違う考えへと変わっていた。
あの男に、勝ちたい。

＊　＊　＊

それから一ヶ月経つか経たぬかという内に、この二人の名前はメリア騎士団中に知れ渡ることとなった。
レグラスの戦闘に関する学習能力は大したもので、数度の戦いで相手の攻撃の特徴を見極めると、的確な反撃手段を見せる。最初はいい遊び相手になるだろうとタカをくくっていたファズですら、今では苦戦する程だ。彼には同じ攻撃は通用しないのだ。
そんな二人がまたある時、同じ詰め所の担当になった時の事だった。

季節は段々と暑さを増し、夏はもう間近と思われる頃。
メリア郊外、ハークス村の詰め所に一人の村人が人目を忍ぶように現れた。
「騎士様。どうか、私の話を聞いてはくださるまいか」
その村人は中年に差し掛かった年齢だろうか、腰は低く、いかにも苦労人といった言葉が相応しい出で立ちで、額には玉のような汗

を浮かべているが、それを拭こうともしない。
幸か不幸か、その場にはファズとレグラスの二人しか居なかった。共に詰めている他の二人の騎士は周囲の見回りに出たところで、戻るまでにはまだまだ時間がかかりそうだ。
「とりあえず、話してみたらいいよ」
村人に応えたのはファズだった。彼は大抵の相手には軽い調子で話しかけるが、それは決して相手を見下している訳では無いことをレグラスは知っていた。無論ある程度正式な場ともなればそのような真似はしないが、そもそも彼は伝統やしきたり、礼儀というものをあまり気にかけていないのだ。
師に教わる伝統の剣術ではなく、自ら野に出て独自の剣術を作り出すあたりもその性格を反映しているのだろう。
この点では、今も騎士の偶像を追いかけずにはいられない自分とは根本的に異なっているとレグラスは感じていた。
「私は、つい半年ほど前まで領主様の元へと勤めていたのです」
村人は静かに語り出した。どうもこれは話が長くなりそうだと思った二人は姿勢を改める。
「領主様はとても素晴らしいお方でした。真に農民の為を思ってこの村を治められていました。無駄に我々から税を搾り取るような真似はしないどころか、農民達の農作業を手伝ってくださることすらありました。
――それが、一年ほど前からです。ある日を境に、領主様は突然何かに怯えたように振る舞われるようになったのです。
もちろん、私にも怖い物はありますし、いかに領主様とはいえ何かを怖れるのは決しておかしいことだとは思いません。
ですが数日、数月、時が経つほどに領主様はますます怯えの色を強くするようになっていったのです。
それでもその間、領主様は表面上では今までと変わらず、善政を続けていたのです。
ただ、その頃、一度だけ領主様は使用人の中でも古参の私に向か

って一度呟いたことがあったのです。
『何とかして、幾人かの騎士をこの館へ招くことはできまいか』と――。
当然そのような事は容易ではありませんし、その場ではあまり深く考えず、すぐに忘れておりました。
しかし、そのうちに領主様の顔色はますます優れなくなり、ついにある日、領主様から使用人全員の解雇が言い渡されたのです」
「なかなか面白いミステリーじゃないか。彼をそこまで怖れさせたものとは一体何か？」
ファズがおどけた調子で茶々を入れる。だが、決してふざけている訳ではないことはその眼を見れば分かる。
「騎士様、話にはまだ続きがあります。
――その後、領主様は各地の騎士団に人員を要請していたようなのです。が、その……、畏れ多いのですが、領主様といえども国全体では決して高い位にあるとは言えません。自らの館に騎士を置くなど、とても許された物ではありませんでした。
もしかすると、このような詰め所がありながら何を望むか、反乱の兆しかとお疑われになっていたかもしれません。騎士団からの人員派遣はもちろんありませんでした。
そうしたことを繰り返す内に冬は過ぎ、春となり、領主様がおかしくなられてから一年が経とうとしているのですが、――騎士様。ここからが本題なのです。
私は今でも領主様の人柄に惹かれているのです。
ですから、故郷に帰ることもせず、この村に家を持ち、領主様のお側で日々暮らしています。
いや、はっきりと申しましょう。
領主様はなんらかの理由で暗殺の危機に瀕していると私は判断しましたので、毎日、領主様の館に出入りする者、近づく者を見逃すまいとしていたのです。
けれども領主様の館に近づく者はまったくおらず、領主様自身も

先日、メリアでの会合に出かけた以外は館に閉じこもっておられました。
しかし、五日ほど前からの事です。
館に近づく者は無いにもかかわらず、何か不気味な雰囲気が館を取り巻き始めたのです。
初めはただ、自分が疲れているのだろうと思っただけでしたが、翌日も、またその翌日も、館からは不気味な空気が感じられます。
時たま、館の窓に不気味な影が映る事もありました。そして今朝、その影の正体をついに見てしまったのです。
――あの姿が目に焼き付いて離れないのです」
村人は両目を覆うように押さえ、俯いた姿勢で呻くように続けた。
「悪魔だ――。聖書で語られし不浄の存在。――それらが何匹も、領主様の館を這い回っていたのです……！
領主様は暗殺者などには狙われていなかった……、悪魔の裁きを怖れていたのです。
でも、あの素晴らしい領主様が何故……」
村人はそのままの姿勢で動かなくなった。泣いているのだ。
「悪魔ときたか。これはまた厄介な話だよね」
ファズはため息をつく。グランドール国教では悪魔を不浄の存在としているが、その存在から逃れる術は語られていない。
唯一、神に仕える僧侶ならば何らかの対処は出来るだろうと思われるが、その助力を乞うには一度メリアへと戻らなければならない。
メリアまではここハークスの村からだと大体一日はかかる。往復すれば二日だ。　今朝、まだ悪魔が領主の館にいるとすれば、おそらく領主はまだ無事なのだろう。裁きを終えた悪魔がいつまでも地上に居座る理由が無いからだ。
この村人の言う不気味な空気を悪魔の気配とすれば、既に悪魔が現れてより少なくとも五日が経過している事になる。これに加えてこの先二日間、領主が無事であるという保証はあろうか？
と、それまで黙って話を聞いていたレグラスが突如口を挟んだ。

「ファズ！　不浄なる存在を目前にしてただ眺めているなどと言うことが出来ようか！？
すぐに支度して館へ乗り込もう。そして我々の正しき剣で裁き返してくれよう」
相変わらず何かを勘違いしたかのような騎士ぶりだが、熱意だけは感じられるその言葉を言うと、レグラスは腰に掛けられた剣を「出番だぞ」とばかりに手の平で軽く叩き、潜入行に向けての準備を始めた。
「そうだな。事は急を要するみたいだし、とりあえず俺達二人で偵察にでも行ってみるか」
諦め顔で呟くのはファズ。最悪の場合、自分だけでも逃げればいい。……と、言うは易し、だが。
ファズもレグラスに続いて支度を始めたが、ふと忘れていた事を思い出して、未だ嘆いている村人に言付けする。
「もうすぐここに二人、騎士が帰ってくる。彼らにさっきの話をもう一度繰り返して、メリアに増援を頼むように伝えてくれないか？」
村人はようやく落ち着いたのか、顔を上げて返事した。その返事を合図としたかどうかは定かではないが、ファズとレグラスは支度を終え、領主の館へと向かった。

領主の館はハークスの村を中心に詰め所と正反対の位置にあり、その間には多少の距離がある。
時刻は日も暮れ、農民達が仕事を終えて家へと帰る頃。今、レグラスとファズの二人は村の中心寄りの酒場にいる。店の奥の目立たない席で領主救出の計画を練っているのだ。
とはいっても、詰め所を出てからずっとこの店へいるという訳ではない。実際、二人が館へとたどり着いたのは日が暮れるにはまだ早い昼過ぎ頃だったし、その時はろくな計画も立てていなかったのだ。
ここで、話は数時間前のその時に戻ることにする。

先程の男の言葉通り、領主の館には遠目から見ても分かるほど不気味な雰囲気がたちこめていた。
まだ外は明るく、晴れているというのに、その一帯だけが曇り空の立ちこめた夜のように感じられる。
「こりゃ、本物だな」
ファズはしきりに感心している。
「ああ、悪魔が現れたとしか言いようがない空気だ」
レグラスは真顔だ。不浄なる悪魔は忌むべき存在である。そう心の底から信じてやまないのだ。
「とりあえず……、少し中を探ってみるとしよう」
二人が館の入り口へと向かって行くと、まずレグラスが不審に気付いた。
門が開け放たれている。
こういった場所の領主は、ほとんどの場合部外者を邸内に入れようとはしない。
その為、日頃は門前に見張りも兼ねた取り次ぎの者を立たせ、門は閉じておくのが普通である。
だが、この館には見張りもいなければ門も開いている。その門に近づいてみれば、やはり人の気配は無い。使用人全てを解雇したとの話は先刻聞いているが、それにしても入り口を開け放っているのは異常なことだ。
二人は互いに見つめ合うと軽く頷き、腰の剣を抜き取ると慎重に門の中へと足を踏み入れた。
門から館までは数十メートルほどの距離があるが、どうやらその間に人や悪魔の気配は無いらしい。
――いや、悪魔に気配というものがあるのかどうかは分からないが。
だが、二人の読みは特に間違っていなかったらしく、館までは難無く辿り着くことが出来た。

少し近づいた頃に分かったのだが、この館の扉も半開きになっている。
明らかに、何者かが館へ侵入している。
ファズは剣を構えつつ、躊躇することなくその扉を蹴って開けた。
――辛うじて中が見渡せるほどの薄明かり。扉の向こうは大広間のようだ。この手の館にありがちな間取りである。広間の奥には二階への階段があるようだ。少し上に目を移すとその二階が見える。また、二階のどこかにもうひとつ階段があるのだろうか、更にその上に三階がある事が分かる。要するに、この広間は吹き抜けになっているのだ。ありがちな一階の間取りに対し、珍しい吹き抜けの天井とは気の利いた設計だ。
「こりゃあ、攻めにくい館だな」
ファズは何かを見るたびにうんうんと頷いて感心している。まるで状況を楽しんでいるかのようだ。
彼の言うとおり、二階や三階、特に三階に弓兵を配置しておけばたとえこの館が外部から攻められる事になったとしても、どこか、恐らく隠れた位置にある三階への階段を守りつつ、眼下の敵へと弦を引けばいい。
おまけに、敵は悪魔であるかもしれない。悪魔といえば聖書では大体が禍々しい翼を持った姿で描かれている。この場所でもしも彼らが二人を害そうとしているのなら、この吹き抜けは彼らにとって絶好の地形と言えるだろう。
では、と視点を下に移してみる。大分目が慣れてきたせいか、先程は分からなかった隅の扉や家財品が確認できる。そうして入り口の扉から離れぬよう、周囲を見渡していると、階段の脇あたりに誰かがうずくまっているのが見えた。
「人がいる。階段の影になっているあたりだが、分かるか？」
レグラスはファズの肩を叩いて教える。ファズもそう言われて、それが人間であることに気付いた。
だが、その人間はぴくりとも動く気配はない。むしろ、階段にも

たれかかって倒れているようにも見える。
――これが領主の末路か？
言葉には出さなかったが、二人とも同じ思いを抱いてその人間へと向かっていった。駆け寄るレグラスに対し、ファズは慎重に周囲を伺いながら歩いていく。
だが、その二人の進行はすぐに止まってしまった。正面の人間の姿が正確に見て取れたからである。
その人間は、頭から、こちら側とは逆の腕にかけて斜めに切断されていた。丁度首を経由して鎧の継ぎ目を狙っており、折角の鎧もなんら役に立っていない。
そう、目の前の死体は鎧を着ていたのだ。レグラスやファズと同じ、騎士の鎧を。
見回りに出ていたはずの二人の騎士も、やはりこの館を異様と見なしたのだろう。そのうちの一人は、ここで何者か――恐らく、悪魔の仕業によってこの世を去った。
レグラスは、目の前の死んだ男の名を呟くと黙祷を捧げた。ファズもそれに習う。
その時、物音ひとつ無く静まりかえった館の中で、バタバタという羽音が微かに聞こえてきた。
上の階から何かが降ってくる！
身を引いてかわすと、それは床に激突してバラバラに散らばった。何かが潰れるような音を立てた後、金属の破片が転がる音が響く。
――たった今降ってきた物が、もう一人の騎士であったことは疑うまでもなかった。
それに続いて、キィキィという硝子を爪でひっかいた時のような声と共にまた何かが急降下してきた。
目を凝らすと、それは異様なシルエットの怪物だった。それも１匹ではない。――三匹いる。
「貴様等が悪魔か！　不浄なる者！　先輩達の仇、討たせてもらう」
レグラスは急降下してきた内の一体の最初の一撃を防ぐとすぐさ

ま反撃を始めた。
相手の初撃は両腕の鋭い爪によるものであった。また、相手は翼を持っており、飛び上がられるとこちらが不利だ。そこまで判断したところでレグラスは相手に猛攻をかけ、体勢を立て直すチャンスを作らせないことにした。
先程の死体からも分かるとおり、敵の爪には大変な殺傷能力があり、また、相手の弱点を読んで攻撃をかけるだけの知能は持っているようだ。
だが、敵は防御に関してはこと弱い。人間の皮膚とは違い鱗のような物が身体を覆ってはいるものの、鎧のような防御力はない。こちらが相手の攻撃をうまく逸らして鎧で受け流せばいいのに対し、向こうはこちらの攻撃を避けるか爪で受ける以外に防御することはできない。
レグラスは悪魔が自分の首へ向かって両腕を大きく振り下ろしてきたのを見ると、これの片方を肩で受け、もう片方を剣でなぎ払った。怪物の片腕が切断され、振り下ろされた腕の勢いもあって闇の彼方へと飛んでいく。片腕だけになった悪魔を息の根が止まるまで斬り続けるのは、難しい仕事ではなかった。
ピクピクと動いていた肉片の動きも止まり、確実に悪魔が息絶えたことを確認すると、レグラスはファズに目をやった。
ファズはレグラスよりも速く、2匹の悪魔を相手に勝利していたようだ。
「戦場では、もう少し周囲に気を配ってくれよな。後ろから斬られるよ」
ファズがやれやれといった調子でレグラスに向き直る。
レグラスは全く気付いていなかったが、一匹目の悪魔と戦っている時、もう一匹の悪魔が彼の背後から奇襲をかけようとしている所を見つけたファズは、目の前の相手に素早い斬撃を与えるとすぐさま身を翻してその悪魔を斬りつけたのだ。レグラスの背後を取った悪魔のさらに背後をとった形になる。滑稽な図ではあるが、実戦で

は生き延びることが何より大事だ。
「ありがとう――」
、ファズ。と言いかけてレグラスが口をつぐんだのは、またもやキィキィという鳴き声が聞こえてきたからだ。それも一匹や二匹ではない。――大量の。
「ひとまず、戦線離脱しておくかな」
ファズの一言を合図に、二人は素早く館を抜け出した。
どれほどか、正確には分からないが、敵は少なく見積もっても十匹はいただろう。ここでそれだけの数を相手にしては、いくら剣の腕では一目置かれている二人とはいえ勝つ可能性は少ない。
さらに、レグラスに取ってはこれが初めての実戦であったのだ。思わぬ不覚を取る可能性も無かったとは言えない。現に、先程の戦いですら彼はファズによって命を救われているのだ。
無駄死には騎士の役目ではない。レグラスは一人で勝手に納得した。
館を抜け出した二人は今後の対策を練るべく、酒場で夕食を取りつつ相談しているという訳である。

「もはや、領主がどうとかいう問題じゃないだろ。俺達ではどうしようもない。――それに、奴らは領主を裁くどころか、俺達にまで襲いかかってきたじゃないか」
悪魔は剣でも倒すことが出来た。もう敵の正体は分かっている。今すぐ領主を助けよう――と主張するレグラスと、相手の数が多すぎる、日数はかかってもメリアへ応援を頼みに戻るべきだと主張するファズの議論が続いていた。
議論といっても、義を主張するレグラスと策を主張するファズでは話が噛み合わず、平行線を辿っているのだが。
そうして数十分の時間を無駄にしてから、ようやくファズは無駄に気付いた。
「では、二人で今すぐ領主を助けるとして、レグラスはあの大量の

悪魔に対して、何か秘策があるのか？」
「そ、それはだな」
敵の手の内は読めた。覚悟を決めて再び挑めばばなんとかなるだろう。そうは思ってみても、それは根拠のない自信でしかなかった。
レグラスもようやく自らの意見の欠陥に気付き、話はあっさりと決着がついた。勇猛果敢に戦う自分の姿だけを追いかけていて、ファズの意見はただの逃げ腰だとしか思っていなかった自分を恥じる。
「二人で闇雲に突っ込んでも勝ち目があるとは思えない。ここは悪魔に詳しい司祭様や魔術師の助けを得るべきだろう」
ファズの一言によってこれから取る行動が決まり、二人は店を出るとメリアに向けて歩き始めた。
ここで馬を使えば良いと思われるかもしれない。だが、ファズやレグラスのような新参の下っ端地方騎士が騎士の象徴である馬を扱うなど、如何なる場合でもそうそう許される事では無く、また地方の農村に早馬が常備されているとも限らないと言うことを一言補足しておく。
万が一馬の用意があり、ファズが強硬にこれを使うことを主張したところで、レグラスが騎士の名誉を盾に意地でも譲らなかったであろう事も補足しておくべきか。幸か不幸か、この村に馬の備えは無かった。

＊　＊　＊

日が昇り、段々と大地が熱を増してきた頃、二人はようやくメリアの城壁へ辿り着いた。
計算上ではこのペースを維持できればメリアとハークスを一日で往復することも可能なので、体力に自信があるならば一度挑戦してみるといい。
レグラスとファズの二人は初夏の日差しにすっかり汗だくになり、夜通し歩いたせいで疲労も極限に達していた。

市内へ入った二人は朝食を摂りつつ体を休めると、疲れた身体に鞭打って騎士団本部へと戻って事の次第を報告し、さらに国教会と魔術師学院へと赴いて助力を依頼することに決めた。
本部ではロンバルト団長は急用で席を外しているとのことで、代わりに副団長のルドルフが応対した。
彼は団長のように実力のある人物ではなく、単にこの地方最大の貴族の一家である事と長年勤めている事だけを理由に、ここまでの地位を得た男である。禿げ上がった頭に脂肪で大きく膨れ上がった体でふんぞり返ったその姿は、どこから見ても大した人物ではない。
それを裏付けるように、二人の報告についても面倒そうに「勝手にしろ」と一言答えたのみで、失われた騎士の穴を埋める事や、その他の対策については一切触れなかった。
メリア地方騎士団の上層部がこんな人物ばかりだから、ロンバルト団長は未だに地方騎士団長の座に留まっているのだろうか。噂に拠れば、彼は王国騎士団や、近衛騎士団からさえも誘いの声がかかっているらしいが、何故かそれらの申し出を受けずにいる。
無能な地方騎士団を放っておけないのか、それとも単に出世欲が無いだけなのか……。
とにかく、文字通りの報告に終わってしまった本部を後に、二人は助力を求めに町を歩くことにした。

始めに赴いた国教会は、何やら慌ただしい様子でなかなか二人を取り次いでくれなかった。
しばらく待って、ようやく一人の司祭が話を聞きに現れたが、この男がまた大したことの無さそうな中年親父で、一応司祭のローブは身にまとっているものの、冴えない赤ら顔に冴えない表情を浮かべ、中年太りで腹がぷくりと膨れている。いかに権威のある教会の司祭とはいえ、どれほどの実力があるのかが疑わしいほどの人物だった。
「おやおや、騎士様が二人も揃って珍しい。一体どんな用事がある

というのだね？」
中年親父は陽気に話しかけてきた。
いかに怪しげであっても、彼の身なりは司祭であることを示している。二人は一応信用して事の次第をうち明けた。すると、中年親父は顎に手を当ててしばらく考え込む。
「申し訳ないが、最近南方で良からぬ事が起こっているらしく、そちらに人手を取られている状態なのだ。
一応都合の付きそうな者は探しておくが……、明日また来てくれないか？」
申し訳なさそうに言うが、その反面、面倒を抱え込んでしまった事を嫌がっている風にも見える。
ハークス領主の命がかかっているせいもあり、あまり悠々としてはいられないと怒鳴りたくもなったが、この中年親父が馬車を用意し、それに乗るに相応しいだけの人物をなんとか探し出すとまで言うので渋々承諾し、教会を後にした。

次に立ち寄った魔術師学院は、ひっそりとして静まりかえっていた。取り次ぎの者に話を聞いてみると、南方に不吉な兆しが現れたとの事で、ほとんどの教師や生徒が南へと旅立ってしまったらしい。
不吉なだけで旅立つというのもおかしな話だが、もともと魔術師学院は変人が集まっているので何もおかしくはない。
神官ならば神の言葉に従って行動しているが、魔術師は自然の言葉に従っているといったところか。春の花がまだ咲かないからと生徒全員で登山し、自然現象を観察したりといったことは日常茶飯事なのである。
従って、二人は特に気にすることなく、学内に残っている人物を誰か貸してくれないかと尋ねた。
取り次ぎの者が校舎に入り、しばらくすると二人を奥の部屋へと案内した。
その部屋にいたのは、腰が曲がり、皺だらけで鉤鼻のいかにも偏

屈魔術師といった感じのじじいだった。
先程の教会に続き、運が無いとは思ったものの、一応事の次第をうち明けてみることにした。
「成る程。だが、それは悪魔なんかでは無いぞえ」
じじいは掠れた声で二人の話の感想を述べた。
「魔術師様、悪魔でないと言われるなら、あれは一体何だったのでしょうか？」
レグラスはこういうじじいの前でも礼儀作法を忘れない。
「それはいずれわかるじゃろうて……、ヒヒヒッ」
じじいは意味ありげな言葉を吐くと、今まで座っていた椅子から立ち上がり、よれよれと部屋の中を徘徊し始めた。
「お主らは魔術師の助っ人が欲しいようじゃが……、適任者がいるぞえ。それはワシじゃ」
お断りだ。確かに怪しい魔法を使わせれば右に出る者はいないだろうが、その老齢では却って足手まといになるだけだ。と、言葉には出さなかったが、二人の考えはほぼ同じだった。実際ファズは言いかけた。
ただし、足手まといになることが、老人への負担と考えるか、自分への迷惑と考えるかの点で二人の考えは違っていた。
「と、言いたいところじゃが、何分この身体、思うように動かんわい。ほれ、リーフルや」
じじいは部屋の奥の扉の所まで歩くと、扉を叩きつつ、誰かの名を呼んだ。
ほどなくして、扉が開く。
中から現れたのは、ファズやレグラスとほぼ同年代に見える女性だった。
――ということは、十七、八くらいだろうか。若干幼くも見えるが綺麗に整った顔立ちに、肩まで伸ばしたブロンズの髪やローブの上からでも分かるスタイルの良さは、普段二人や他の誰もが魔術師に抱いているイメージとは裏腹に、相当の美人であった。

騎士気取りのレグラスはともかく、ファズは明らかに目つきを変え、好奇と驚きの目でその女性を見つめている。
「リーフルや、話は聞こえておったじゃろう。この男達の手助けをしてやってはくれないかね」
じじいはそう言うと、そそくさと部屋から出て行ってしまった。否定の余地を与えないやりかただ。
――なんて話だ。
騎士団には同年代の女性と知り合う機会は意外と少ない。
半年に一度のダンスパーティに参加すれば、騎士様は女性達の憧れの的なのだが、それ以外での出会いではほとんど無いといっていい。
そんな騎士二人だけに、この女性が同行するという話は衝撃的以外の何物でも無かった。嫌でも異性というものを意識せざるを得ない。
後に残されたリーフルと呼ばれた女性は、じじいの後ろ姿を見送っていたが、彼が視界から消えてしまうと二人の方を振り向いた。
「なんだかよく分かりませんが、あなた達の手助けをすることになりました、リーフルと申します」
そして、軽くお辞儀をする。やはり魔術師だというところか、どことなくつかみ所の無さそうな印象を受ける。
騎士二人の方も突然の美女出現によく分からず混乱しているが、目標であった助っ人はどうやらこれで安心だと判断することはできた。
彼らはリーフルに詳しい事情と明日の朝、広場に集合する事をしどろもどろに伝えると、魔術師学院を後にした。
ちなみに、リーフルの師でもある先程のじじいはガルハヌスといい、高名な大魔術師である。
騎士二人がまったくそれに気づかなかった点は彼らの勉強不足であり、誠に遺憾ではあるが、彼の偉業は本筋とは全く関係が無いため、ここで語ることは避けておく。

このグランドール王国の歴史を語る上では覚えておいた方が良い名前である、かもしれない。

その後、疲れ切った二人は騎士団本部の寮へと辿り着くと泥のように眠り、翌日の朝一番に教会へと再び赴いた。

二人を出迎えたのは、やはり例の赤ら顔の中年親父だった。

「で、どうでしたか？　誰か見つかりましたか？」

単刀直入にファズが切り出す。だが、中年親父の顔色は優れない。

「色々と努力はして見たのだが、どいつもこいつも忙しいときている。申し訳ないが、私が同行するという事で勘弁しては貰えないか」

中年親父は心の底から申し訳なさそうな様子は見せるが、相変わらず付き合うのが嫌だという事も顔に出ている。

レグラスとファズは一瞬顔を見合わせたが、他に手空きの神官がいないというなら仕方ない、と彼の申し出を受けることにした。

「こう見えても私はそれほど身分の低い者ではない。私の馬車に君達を乗せても咎められることはないだろう。しばらく待っていてくれ――」

中年親父はその場を離れ、少し経つと一台の馬車を引いて戻ってきた。

「私はラウンと言う。少しの間だけだが、よろしく頼む」

その後、広場へ立ち寄ってリーフルと合流し、互いに自己紹介などをしつつハークスの村へと向かった。

ハークスへと戻ったのはその日の昼過ぎだった。レグラスとファズの二人が最初に館に踏み込んだ時も日暮れ近かったので、ほぼ二日が経過している計算になる。

移動中の会話により、各自の性格などは大体把握出来ていたが、最も驚かれたのはラウンの話だった。レグラスにとっては教会関係者と言えば、純粋に神を崇める者か、権力の為だけに存在しているような者が想像される。

ラウンの場合は明らかに悪魔退治を嫌がる態度からして、後者だろうと思っていたのだが、この男はどちらにも属せず、むしろ一般人に近いような男であることが分かった。
今回の件も単に彼が面倒くさがりであったり、「怖いから嫌」といった事が原因のようだ。
それ以外にも、聖職者にはあるまじきギャンブル体験談や巡礼と称した各地の旅行、酒の話など、悪どいというか、俗世間的というか、とにかく変な中年である。
おまけに、どういった人生を送ってきたのか、女性慣れもしており、なかなかリーフルに話しかけられない騎士二人の仲介役になるといった事も幾度かあった。
ただ、彼女へ向ける視線が実にいやらしい好色な物である点は気になったが。
そんなラウンがただの変人で無い事が分かったのは、村へ到着してすぐの事だった。
「騎士様！　ようやく戻られましたか！」
馬車から降りた一行の元に現れたのは例の村人であった。初めは気付かなかったが、この男は元館勤めということもあって村の代表のような立場に立っているらしい。
「突然この村から消えてしまった時はどうなるのかと……。
しかも、騎士様がここを離れてからというものの、夜な夜な悪魔が村へと現れるようになったのです。
既に、二つの家の者達がその手にかかって……。
騎士様が何か悪魔の怒りに触れるような事でもしたのではないかと噂する者もある始末でした」
村人は悔しそうに言葉を詰まらせた。最後の方には無礼な言葉もあり、レグラスは反射的に苦い顔を見せたが、事態が事態だ。彼のことは不問に帰しておこうと考えた。
あの悪魔が館を出て村を襲ったというのは驚くべき事だが、それ以上に驚いたのは、二人がこの村を立ち去った直後から悪魔が活動

を始めたという事だった。
自分たちのせいで悪魔達があの館の外へと攻撃目標を変えてしまったのか。それならもう少しここに滞在していたら死んでしまった村人達を救えたのかもしれない。
――しかし、そうしていたら自分が命を失っていたかもしれない。
レグラスも悔しかった。村人を救えなかった自分と、死を怖れている自分が。
もちろん、過去へと戻ることは出来ない。終わったことよりもこれからの事を考えることが重要なのだろう。
「”悪魔”か。明らかに不浄な空気が漂っている事は分かるんだがな」
ラウンは一行を馬車に乗り込ませ、館の方へと走らせた。

館へ着くと、その周囲は二日前にも増して邪悪な空気が漂っている。馬車からいくつかの荷物を抱えて降りたラウンは、それを広げて館の前に簡易の祭壇を作り上げた。
聖職者の使う神聖魔法は祈りによって神の力を借りる魔法である。神への交信方法はただ念じることから生け贄を捧げることまで様々であるが、その中でも効果的な手段の一つが祭壇を用いることである。
祭壇から発せられる特定の波長と合わさると神へ祈りが届きやすい……などと言った科学的な根拠があるのかどうかは不明だが、旧文明を思わせる彫刻の祭壇等の前で使われる神聖魔法は明らかに威力が違う。
王都にあるグラン神殿のような大規模の神殿ともなると、神殿自体がひとつの巨大な祭壇のようになっており、駆け出しの神官でもその神殿では強力な神の加護を得ることができるというから不思議なものだ。
ラウンは祭壇の前でしばらく黙ったまま祈りを捧げていたが、突如立ち上がり、何かの言葉を叫びだした。それは恐らく神の言葉に

近い上位言語などといったものであろうが、そちらの方の教養がないレグラスやファズには理解することはできない。知識人である魔術師のリーフルなら多少は分かるのだろうか。
その叫びが終わると、今度は館めがけて突き出したラウンの指先から強力な光が放たれた。
しばらくの間まばゆい光が続き、やがてそれが薄れていく……と共に、館を包む邪悪な空気は一掃されていった。
「不浄なる物を浄化する初級の神聖魔法だ。館の中の”悪魔”もいくらかは巻き添えを食ったのではないか」
ラウンはこの季節、厚いローブを着込んでいる。それに加えて今の魔法だ。本人の言うとおり、今の魔法は神官のよく用いる初級の神聖魔法に違いはないだろうが、祭壇や本人の能力により相当威力が増幅されている。それを使用した時の疲労は決して少なくはないはずだ。
――にも関わらず、ラウンは汗ひとつかかないどころか、呼吸も落ち着いている。レグラスとファズが感心して彼をずっと見つめていると、それに気付いたか、二人を見つめ返して応えた。
「言っただろう？　私はそれほど位の低い者では無いと――」
ただ一人、リーフルだけは馬車に腰掛けて退屈そうに南の空を眺めていた。
しばらくして、ラウンが祭壇を片づけ終わると、赤く染まりかけた西の空に目をやりながら呟いた。
「大分、時間を取ってしまったな。夜は奴らの活動時間――、今日は館の近くで休み、明日潜入するのが得策だろう」
さきほどの神聖魔法の威力で彼の実力を認めたのか、その意見は何の反論もなく一行に受け容れられた。
四人は村の者に頼み、館に三番目に近いという民家を借りて泊まることになった。
一番、二番に近い民家は前二晩に悪魔に襲われ、哀れにも皆殺しにされた家である。

三番目に近い民家の住民は、次は我が身かと恐れおののいていた所だった事もあり、無条件に借りることができたのだ。
当然、今夜悪魔に狙われるであろう場所である。ラウンが結界を張ればそれを追い返すことはできるが、代わりに他の村民宅が狙われる危険がある。さすがのラウンも村全体をカバーするだけの結界を即座に張ることはできない。領主の館を閉じこめる形で結界を張る案もあったが、そのために一晩中詠唱を続けることでの体力消耗を考えると、たとえ襲撃があっても少しでも休める現在の案が採用されることとなったというわけだ。
また、四人での初めての戦闘を、敵を誘い出す事で有利に進め、敵を見極めたいという事情もある。
民家の内部に糸を張り巡らせ、侵入者があるとすぐに気付くように罠をしかけた上で、交代で見張りを勤めることを決め、四人は順番に眠ることにした。
「なぁ、どう思うか？」
浅く眠っていたレグラスに突然話しかけたのは相棒のファズだった。
「ん……、何がだ」
起きようとする心と眠りたい心がぶつかって、ふにゃふにゃとした言葉になる。
「知らないオッサンと年頃の女の子、そして俺達の四人が同じ部屋で眠っている現実についてだよ」
どうやら今はファズが見張りの番らしい。いくら暇だからとはいえ、体を休めている仲間を起こすことは無いだろうに。
騎士は休める時に休み、戦う時は華麗に戦うものだろう。どうもファズにはレグラスの騎士道精神が理解できないらしい。
「悪魔を倒すための事じゃないか。別に何も思わないが」
ようやく体を起こしたレグラスだが、少し腹が立ったのでぶっきらぼうにそう言うと再び横になって眠ることにした。
もっとも本当は、何も思わないというよりは、理由をつけて何も

思わないようにしていると言った方が正しい。
「だからな、なんというか、その、一目惚れとでも言うのかな」
「えっ、あのオッサンにか！？」
驚いたレグラスはまた体を起こしていた。
「違うに決まってるだろ。もう一人の方だよ。
なんだか、最初に会ってからずっと気になっているんだ」
ファズはぼそぼそと言う。これが冒険の夜効果というものなのか。見知らぬ土地へ行き、夜を迎えた時、不思議と各人が本音で語り合う会が始まるという話は有名だ。
「だ、だから何だ。どうせ普段女性に接していないからそう感じるだけだろう」
冒険の夜効果に驚きながらもレグラスは分かったような振りをする。そういう自分も女性経験はゼロどころかマイナスになる程なのだが。
「いや、そんなことは！　これでもご婦人からの誘いは多いんだよ。でも、そういうのとは違って……。
ああ、しかし、あのオッサンもああ見えて実は凄い奴だったよな」
ファズは突然話題を変えた。自ら話題を振っておきながら、発展させづらい話であったらしい。
これを読みとったかどうかはともかく、レグラスは新たな話に乗ってあげることにした。
しかし、騎士団中でも実力があり、同性から見ても容姿端麗であると認めざるを得ないほどのファズが、自分と同じく異性に無縁であるはずが無いことぐらい考えてみればすぐに分かることではあった。
つまり、彼は言葉の軽さ以上の一目惚れをしているらしい。
「あれだけの力があるからこそ、毎日を悠々と過ごしていられたのだろう」
話題は中年司祭に移っていた。彼は間違いなく一角の実力者だった。そんな彼の自由な振る舞いに対して文句を言う者は、これまで

にいなかったのだろう。
そう考えれば、楽に過ごせる神殿を離れ、この仕事に駆り出させられた事に不満を感じても仕方がないだろう。
事実、本人は馬車の中で堂々とその事を言い切っていたのだ。
しかし、彼には命を捨ててまで誰かを助けようという意志などは存在しないのだろうか？
自分自身は人生を楽しんでいるようだが、他人の幸せなど考えていないようにも思える。レグラス自身は騎士として他人の幸せを第一に考えているが、ファズはどうだろう。
――ファズもラウンと同じ匂いがする。実力のある人間は知らず知らずのうちに他人のことを考えなくなるのだろうか……。
「星が綺麗だ」
しばらく無駄話を続けた後、レグラスは窓の傍へと歩み寄った。もうすっかり目が冴えてしまっていた。
窓の近くにある柱には、家中に張り巡らされた複数の紐の先端が場所別に分けられて繋がっている。紐に侵入者の体の一部でも引っかければ、これがほどけて床に落ちるという訳だ。
その時、説明通りの原理で、紐が床へ落ちた。だが、その罠はあまり意味をなさなかったと言っても良い。
突然ガラスの割れるような音が響き、例のキィキィという鳴き声が聞こえたのである。
「皆起きろ！　悪魔が来たよ」
椅子に座っていたファズは勢いよく立ち上がると、大声で仲間達に呼びかけた。だが、その声を聞くまでもなくレグラスは起きていたし、リーフルは悪魔の鳴き声を聞いた途端に起きあがっていた。
この時真っ先に廊下へ剣を向けていたファズはともかく、レグラスはあまりに素早い彼女の動作に思わず彼女をジッと見つめていると、彼女はレグラスに目を合わせ、
「ずっと起きてましたから……」
恥ずかしそうに俯いた。魔術師には本当に変人が多い。

ただ一人、ラウンだけが唸りながらゆっくり上体を起こして伸びをした。
その彼がようやく立ち上がった頃にようやくキィキィと騒がしい音が間近に聞こえ、それと共に部屋の扉が蹴破られると忌まわしき不浄の存在が姿を現した。
だが、この一匹目の悪魔は待ちかまえていたファズによって一撃で両断されてしまった。
ラウンはのそのそと神聖魔法を唱え、両断された悪魔を無へと帰す。その時、今度は窓ガラスをうち破ってもう一匹の悪魔が部屋へと入り込んできた。
すかさずレグラスはこれに斬りかかるが、さらにもう一匹が割れた窓から侵入し、彼に向けて大きく両腕を振りかぶる。
悪魔の腕が今まさにレグラスへ向けて振り下ろされようとする瞬間、室内が一瞬オレンジ色のまばゆい光に包まれると、彼に向けて振り下ろされるはずの腕は消え去り、その代わりに黒煙と焦げ臭い匂い立ちこめた。リーフルの放ったファイアーボールの呪文だ。
ちらりとリーフルに目をやると、彼女は驚くほど真剣な表情で複雑な身振りをしながら何かの呪文を唱えている。
レグラスは視線を敵に戻すと、最初に仕掛けた悪魔にとどめを刺した。両腕の消えた哀れな悪魔は既にラウンの放った気弾によって原型を無くしている。
悪魔は次々と現れたが、一つの部屋を拠点に戦う四人を攻め落とすことは不可能に終わった。
後々思い返すと、総勢十数体程の悪魔が現れたようだが、その全てを倒し終えた頃には既に東の空が明るくなっていた。
おまけに、部屋中体中にどす黒い液体がべったりと塗りつけられている。これは気色が悪い。
「戦いに一番必要なのは、衣服かもしれんな。この匂いには耐えられんわ」
ラウンが忌々しげに呟いたのも無理はない。

一行は早々とその家を出ると、近くの川で適当に服を洗って汚れを落とすことにした。
これを提案した時、ラウンは何かをファズに耳打ちし、彼は大いに期待を抱いたらしいが、残念なことにリーフルは上着のローブすらほとんど汚れておらず、助平共が彼女の水浴びシーンを拝むことは叶わなかった。
民家の柵に腰掛け、南の空を退屈そうに眺めているリーフルを眺めながら、ファズとラウンは舌打ちする。そんな二人をレグラスは騎士として冷ややかに見つめていた。
――本心から冷ややかであったかどうかは分からない。
世間慣れしたラウンのからかうような助平心よりも、抑圧された自分のそういう感情の方が、よほど不適切であるのかもしれない。
しかし、騎士にとって女性とは守るべき存在であり、好色な感情を抱くべき存在では無いのだ。レグラスの心の中に住む真の騎士はそう教えていた。

＊　＊　＊

近所の店で朝食を済ませ、一通り準備を整えるとようやく一行は館へと踏み込むことになった。
昨日のラウンによる魔法によって周囲に漂う邪悪な空気は全て浄化されているが、館の内側からにじみ出るそれは未だ健在である。
何より、昨夜の襲撃こそが彼らの息の絶えていない証拠でもあった。
不浄の領域へ踏み込む緊張感で、レグラスの胸は高鳴っていた。おそらく他の三人も同じだろう。
剣を構え、慎重に、一歩ずつ、無事に館の中へと侵入したまではよかったが、そこは以前とは違う異様な空気で満ちていた。
――血の臭いが充満しているのだ。

真っ暗な室内をラウンがライトの魔法を使って照らすと、その理由はすぐに分かった。
バラバラになった悪魔が床一面に散乱している。
吹き抜けの一階がまるで洪水の後のように赤黒い血液に浸っていた。
「こ、これは……」
最初に異変を指摘したのはファズだったが、さすがの彼もこの光景には驚いたようだ。
とにかく、足の踏み場も無いほどに肉塊が飛び散っている。常人ならば正視できないほどの事態に違いない。
昨夜の戦いの後に残された十数体の悪魔の死体も壮絶な物であったが、それですら比較にならないほどの凄惨さだ。事実、レグラスはこの光景には激しい嘔吐感を覚えていた。
「どうやら領主様はこのために”悪魔”を呼んだらしいな」
その言葉に二人の騎士は驚いた目つきでラウンを振り返る。
「早く領主様を捜した方がいいでしょう。今ならまだ間に合うかもしれませんね」
その後ろで様子を伺っていたリーフルも、ラウンがのしのしと駆け出した後を控えめに追いかけていく。
「どういうことなんだ？」
ファズの問いかけにラウンは足でビチャビチャと音を立てながら、「この”悪魔”はな、領主様が誰かから自分の身を守る為に雇った傭兵なんだよ」
そのまま館の奥へ奥へと進んでいく。
ファズとレグラスは納得はできなかったが、とりあえず二人の後を追うことにした。
一行は急ぎ足に邸内を調べて回った。とはいえ、この追跡行はそれほど難しいものでは無かった。
何者かが戦いながら奥を目指して進んだらしく、その道筋には悪魔の肉塊が落ちている。その死体を追っていくことで、侵入者と同

じ進路を辿ることができたのだ。
しかし、追跡行を続ける内に、この館への侵入者は恐るべき手練れであることが分かってきた。
落ちている悪魔の死体は、そのどれもが確実に弱点への一撃を加えられており、的確に切り刻まれている。悪魔の生命力は恐ろしい物で、どれだけ斬っても起きあがっては襲いかかってくる事は過去二度の戦いで経験として知っていた。
だが、今、周囲に転がっている死体は、腕を落とし、胴体を両断することで動きを封じ、心臓への一撃で絶命させている。三太刀と言ったところだろうか。
その他にも足や翼を斬り落とされた死体もあるが、全てに共通しているのは、与えられた攻撃が必ず的確に体の部品を切り刻んでいる事だ。
相当の技術と、力が無ければとても出来ない芸当である。ましてや、相手は人よりも固い悪魔だ。
そうした事実を目の当たりにしては、この先にいるであろう敵に恐怖を覚えずにはいられなかった。
探索の末、三階奥の「領主の部屋」まで辿り着いた一行は、丁度その時断末魔の悲鳴が室内から漏れるのを耳にした。
四人が室内へ飛び込むと、そこには座り込んだ領主と、血塗れの剣を手にその正面に立つ甲冑を着込んだ騎士が現れた。
レグラスはその光景に違和感を覚えた。あまりにあり得ない違和のせいで気付くのが遅れたのだ。
領主にも、騎士にも、首から上が無かったのだ。
だが、明らかにもう息をしていない領主と違い、首のない騎士は何事もなかったかのように動き、剣を収めると、たった今切り落としたと思われる領主の生首を抱えて一行のいる扉の方を振り向いた。
四人は四人とも身動きできずにいた。あまりの光景にただ呆然と立ちつくすことしか出来なかったのだ。
首のない騎士は、領主の生首を左手で高く掲げると、どこから発

せられた声かは分からないが、高らかに宣言した。
「――予言は果たされた！」
どうやら、その声は騎士の腰に下げられた兜から発せられているらしい。その中に頭が入っているとでもいうのだろうか。
そんなことを考えるだけの冷静さは取り戻しつつあったが、明らかにこの世のものでない首無しの騎士を前に、次の行動を判断出来るほどの落ち着きは戻る気配が無かった。
騎士は領主の生首を左脇に抱え、空いた右手で腰の剣を抜くと、その剣先をまっすぐと立ちすくんでいるレグラスに向けた。
レグラスは反射的に自らの剣を構え、敵の初撃に備える。
しかし、首無しの騎士は剣を向けたまま、腰の兜からくぐもった声を発した。
「次なる予言。
一年後、この者レグラスに死を与える」
ただそれだけを言うと、騎士は剣を降ろし、ゆっくりと部屋の入り口へと歩き始めた。レグラスを除く三人はその威圧感に、思わず後ずさって道を空けてしまう。
だが、レグラスだけはその剣を構えたまま、膝を振るわせながら首のない騎士と対峙していた。
「わ、私が死ぬなどと……、戯れ言を！」
恐怖に駆られた人間が取る行動は二つしかない。その恐怖から逃げ出すか、立ち向かうかだ。
そして、レグラスは騎士だ。騎士であろうとしている。この非現実的な光景に加え、死の宣告までをも受けたレグラスは、騎士として恐怖に立ち向かうしか無かったのだ。
彼は仲間の制止も聞かず、大きく剣を振り上げ、首のない騎士へと斬りかかった。
――だが、何が起こったのか、一瞬後にはレグラスの剣は宙を舞い、首のない騎士はその足取りを一歩も乱すことなく、部屋の外へと歩き去った。

騎士はそのまま吹き抜けの手すりを乗り越えると、一気に一階へと飛び降りた。レグラスの剣が二つに折れて床に落ちる音が沈黙の中に重く響き、少し遅れて騎士が一階へ着地したことを示す軽い音が届く。

レグラス以外の三人が思わず騎士に注目していると、騎士は三階からの着地のダメージなど無かったかのように立ち上がり、ゆっくりと歩いて館の外へと消えていった。

しばらく後に馬の嘶きと蹄の音が聞こえ、やがてそれも遠ざかっていく。

後には、一人の敗北感に打ち震える田舎騎士と、驚きのあまり声も出ない三人の仲間達が残った。

G492　ひとつの終わりと始まり　中編

「我、レグラスの死を予言する」
その騎士には正しい位置に首が無く、腰に自らの首を下げ、なぜかそこから声を発していた。
騎士の足下には、首の無い領主の死体が転がっている。
さらにその周囲では、何かに悪魔が群がっている。目をこらしてよく見てみると、誰かの死体を悪魔が貪っているのだ。
ここは何処だ。
あたりを見渡すと、どうやら領主の館の吹き抜けらしい。手前の階段に立つ首の無い騎士がレグラスに語りかける。
「貴様がこの館に来なければ、その村人達は死なずに済んだ」
首無し騎士はすらりと剣を抜いた。ということは、悪魔に喰われている死体は彼らに殺された村人だろうか。
「貴様はそれで騎士のつもりか？
――ならば、貴様には誰も守れない。ただ、挫折と死が待ち受けるのみだ」
首無し騎士は剣を手にゆっくりとレグラスの元へと歩み寄ってくる。
「そんなことは無い！　オレはいつも最善を尽くしたつもりだ」
レグラスは叫ぶ。だが首無し騎士は歩みを止めずに答えた。
「最善だと？
貴様がしたことといえば、綺麗事を並べ立てて事を荒げただけではないか」
首無し騎士の言葉にレグラスは動揺していた。自分は今まで、紳士でもある清く強い理想の騎士の姿を追い求めてきた。彼が騎士となった一番の動機は金だったとは言え、騎士という職業そのものは彼の憧れであった事に代わりはない。その騎士になるからには騎士らしくあるべきだと思ったのだ。

己の考える騎士道精神のままに動き、騎士の言葉も真似た。
だが、それは上辺だけの行為ではなかったかと胸を張って言えるのか？
首無し騎士の言うとおり、綺麗事を並べ立てて、その奥底は醜い欲望で満たされていたのかもしれない。
しかし、それでは彼が騎士として嫌っていた人々と同じではないか？
騎士の心というフィルタを通さなければ、レグラスはその彼らをも認めていたのだろうか。――思い出せない。
そうしている間にも、首無し騎士は近づいてくる。
ふと、レグラスは自分の周りに何人かの人間が倒れていることに気付いた。
一人は自分と同じ騎士の鎧を、一人は聖職者のローブを、もう一人は、黒いローブを身にまとった魔術師風の姿。
そして、そのどれを見ても首から上が無くなっている。
騎士がレグラスに向けて何かを投げる。床にずしりと落ちて、少し転がる。それは仲間達の生首だった。
「貴様には、誰も救えない――」
目の前で首無し騎士の声が響いた。その直後、想像を絶する速さで彼の剣が振り下ろされる。
レグラスには防御のために両手を動かす暇すら無かった。
何かが潰れたような音と共に首を冷たい物が走ったと思うと、直後にその部分が熱を帯びていく。熱くてたまらない。同時に、レグラスの視線は意志に反して上を向き、そのまま一回転して地面へと落ちてゆく。
頭が地面に落ち、意識が暗転して行く中、レグラスは視線の先に首のない自分の体がゆっくり倒れていくのを目にしていた。
「うわァァァァッ」
己の叫び声に目を覚ますと、レグラスは思わず胴と頭が繋がって

いることを確かめた。
どうやら頭はちゃんと枕の上に、体はベッドの中にあり、二つはしっかり繋がっているようだ。
安心して周囲に意識を向けると、窓からは朝陽が差し込んでいる。遠くからは甲高い鶏の鳴き声が聞こえてきた。
ハークスの村には、昨日までの重苦しい雰囲気が嘘のように見えるほどのどかな朝が訪れている。
昨日、意気消沈として領主の館を出た四人は、ラウンの判断によってひとまず村人に危険が去ったことと、領主が助からなかったことを告げ、自分たちの疲労が極限に達しているので明日、もう一度代表の前で詳しい話をする事を伝えて宿で休んだのだ。
死の宣告に激しいショックを受けていたレグラスは、眠れず、かなり遅くまで起きていたのだと思うが、結局疲れに負けて眠りに就くことが出来た。
おかげで披露は回復したものの、眠っている間悪夢を見続けたために精神的にはすっかり参ってしまった。
げっそりとしつつも朝の支度を整え、ファズ、ラウン、リーフルの三人と合流して詰め所まで歩き、例の村人代表の男を待った。
彼が到着すると、ようやくといった調子でラウンによる事件の説明が開始される。
これは村への説明だけでなく、当事者でありながらこの事件の詳細が未だによく分かっていないレグラスとファズの二人への説明も兼ねている事は雰囲気で読み取れた。
「まず、例の首無し騎士の事から説明しようか」
ラウンは、椅子に座ったまま、机にもたれかかるような体勢で口を開いた。
「あの騎士は、一般的にはデュラハンと呼ばれているが――物語などでもたまに登場する、幽霊だとか精霊だとかいった類の者だ。
彼について詳しいことは知られていないが、剣術にかけては恐ろしい手練れであること、騎士道精神を重んじるものであること――」

彼はそこまでをゆっくり淡々と話し、ひと呼吸置くと、レグラスに目線を走らせて先を続けた。
「――人間の死を予言し、予言した日取りを違えることなく、その人間を自らの手で討ち取りに来るという伝説が有名だ」
この言葉にレグラスは少しびくりとした様子を見せた。
「そして、領主は間違いなくそのデュラハンによって殺され、館には同じくデュラハンによって斬られたと思われる”悪魔”の死体が散乱していた。
このことから推測するに、結論はひとつしかあるまい」
ここまでラウンが言い終えるか言い終えないかのうちに、ファズが口を挟む。
「つまり、あの悪魔は領主様を守るためにデュラハンに斬られたと言うこと？」
「話を聞く限り、領主は騎士の駐留を断られたらしいが、傭兵を雇うにも同じ理由で不可能だったであろうし、何より金の問題もある。
徐々に追いつめられていく中で、領主は禁断の魔術に手を出すしかなかったのだろうな。
あれは”悪魔”でも何でもない、魔法で生み出された哀れな魔物に過ぎぬ」
ラウンはそこまで言うと、話は終わったといわんばかりに机から体を離し、椅子の背もたれへと身を預けた。そんな彼にまたもファズが口を挟む。
「けど、あの悪魔の邪気がオッサンの神聖魔法で浄化されたのはどういう訳だよ？」
ただ報告を理解することに必死な代表の男や上の空で窓の外を見つめているリーフル、それにレグラスは発言をしていないために、この一室はほとんどラウンとファズの質疑応答の場となっていた。
前の二人はともかく、普段積極的に意見をぶつけているレグラスが黙ってしまっているのはデュラハンの死の宣告や彼に敗北を喫したこと、それに夢の中でのデュラハンの言葉などが脳裏を支配し、

話は聞いていても意見を出すには至らなかったからだ。
「失礼なことを言うな。”悪魔”ではなくとも魔法の力で生み出された生物、不浄な存在である事に違いはないわ。
尤も、あの場はお嬢さんに任せた方が適任だったかもしれんがな」
ラウンはファズの質問に答えるとずっと窓の向こうを眺めているリーフルの方に目をやる。
「いえ……、生み出された魔法生物にたいする解除魔法はありませんから、――分解消去の魔法でも唱えればいいんでしょうけど……。
それよりも、それほど魔術に詳しかったと思えない領主様にあれだけの魔法生物を作れた事が疑問です」
リーフルは顔をこちらへ向けようともせず、落ち着いた、しかしどこか夢を見ているかのような口調で答える。ラウンは逆に投げかけられた問いにウーンと唸ってしまう。
「確かに、誰か強力な魔術の使い手が背後に立っているとしか思えんな。
領主の知り合いにあのような物を呼び出せるほどの魔術師がいたかどうか、それだけでも分かればいいのだが――」
と、ラウンは代表の男に目線を向ける。
「領主様にそのような知り合いはおりませんッ」
男は反射的に立ち上がり、大声を張り上げてしまい、ふと魔術師であるリーフルの姿を認めてハッとする。
「しっ、失礼しました。――とにかく、領主様と魔術学院関係の方が関わっていたなどという事はありません」
三人が彼の大声に思わず顔を上げたにも関わらず、リーフルは相変わらず窓の外を眺めており、自分達魔術師が蔑視されたことすら気付いていないようにも見える。
しかしこの男、よく見ると目が赤い。おそらく領主の訃報を聞いて昨晩は泣きはらしたのだろう。よほど彼を慕っていた事が伺える。
「だが、魔物が現れたのは周知の事実。何らかの形で領主が魔術師と接触していたと考えるほかあるまい」

ラウンはもはや呟くように言う。しばらく、静寂が続く。
「ひとつ、気になっていたんだが――」
沈黙を破ったのはファズだった。
「領主様がメリアの会合に出席した時、あんたは付いていかなかったのか？」
代表の男は一瞬何故そんなことを聞くのかと言う顔をし、答える。
「会合の間は騎士様の護衛が付いておりますから、安心だろうと信じておりましたので」
この男は領主の暗殺を心配しながら、騎士の中に暗殺者が潜んでいる可能性は考えていなかったのだろうか、ファズはこの男に聞いてみたかったがやめた。おそらくそこまで考えていなかっただろうし、レグラスに「騎士たる者そのような事はせぬ！」などと言われるのもつまらない。
昨日からずっと落ち込んでいるレグラスにその反論をできるだけの余裕があるかどうかを試してみるのも面白いが。
「なら、考えられる可能性はメリアでの接触しかないだろ」
ファズはそう言うと同意を求めるようにラウンを見た。ラウンは大きく頷き、答える。
「では、メリアで情報を集めてみるしか無いようだな。
――やれやれ、帰ってからも余計な仕事ができてしまったようだ」
以前と同じ面倒そうな口振りだが、今はどうやら本心からそうは思っていないように感じられる。事の重大さと、彼らの中に生まれた少しの連帯感がそうさせたのだろう。
「では、領主に最後の祈りを捧げてからメリアに帰るとしようか」
ラウンは席を立ち。会合は終わった。
既に太陽は一日の内で最も高い位置にあり、どこからか昼食の良い香りが漂ってきた。

＊　＊　＊

葬列は長く、墓地へと続いている。
この葬儀はラウンが取り仕切って領主の館で行われる予定だったが、館内の状態があまりにも酷い為にすぐに行うことはできず、村人達による大清掃が行われた結果、葬儀が始められるころにはもう日も暮れかかっていた。
結局、一行はもう一晩この村へ泊まることになってしまった。
そうしてようやく開かれた葬儀の場で、一同は祈りを捧げた。
儀式が終わると領主の亡骸は村はずれの墓地へと運ばれる。
この地方では土葬が一般的であり、運ばれた遺体はそのまま土に埋められて大地へと還るのだ。
ラウンは葬儀を仕切る都合で埋葬の列に同行したが、二人の騎士と一人の魔術師は詰め所へと戻ることにした。その葬列には親しい親族や世話になった者などが参列するべき場だからである。しかし、その列には村人達のほぼ全員が連なっており、領主への領民からの信頼がいかなるものであったかが伺われる。
詰め所へ戻る途中、ファズは何度もレグラスへと話しかけた。どうやらレグラスを励まそうとでもしているらしい。
だが、当のレグラスは耳を貸さずにふさぎ込んでいるばかりか、詰め所に着くと「一人にしてくれ」と言い残して宿舎へと行ってしまった。
結果、ファズとリーフルの二人が残り、しばらくの間奇妙な沈黙が流れた。リーフルは相変わらず手近な椅子に腰掛けて窓の向こうを眺めている。
「ねえ、リーフルさんは、どうしてずっと、あっちの空ばかり眺めてるのさ」
ファズがたどたどしく問いかけると、例によって彼女はまったく振り向かずに答える。
「南の大地が騒いでいるんです。
――きっと、何か、何か恐ろしいことが起こっているんでしょう」
南の空では幾多の星の中で、一つの真っ赤な星が一際明るい輝き

を見せていた。
一方、レグラスも宿舎の一室でベッド脇の椅子に腰掛け、窓から同じ夜空を眺めていた。
デュラハンに死を宣告されてからの自分は、まるで全ての誇りを失ってしまったかのように思える。
それと同時に、今まで封じ込めてきた自己への疑問が次から次へ沸いて来るのだ。騎士とは何か、型どおりに騎士道精神を重んじる事が騎士なのか、そして自分は本心から騎士道精神を持っていたと言えるのか。
偽りの騎士道精神はただの偽善でしかなく、誰かを守ったりなど、いや自分を守ることすらできるはずがない。事実、レグラスは誰一人守ることが出来なかったどころか、魔物を刺激して被害を拡大させてしまったのだ。
自分の行った事を考えると、わざわざ背伸びして騎士言葉を使っていた事すら恥ずかしい。
デュラハンに宣告された一年後の死。死ぬことは怖い。今この瞬間も死への恐怖に体のふるえが止まらないのだ。
しかし、自分は騎士ではないか。死など恐れず、残された一年を本当に正しい事に使ってみてはどうだろうか。
あの領主のようにいかにそれまで善政を敷いていたとしても、毎日を怯えて過ごしたり、魔物の力に頼ったりしていては駄目だ。
誰かの助けになること、それはやがて自分の助けになるだろう。それは騎士としてでは無く、レグラス自身の意志から生まれた考えだった。
自分自身の力で最後まで力強く、そして正しく生きていきたい。残された一年を正しく生きる、それは実は視野の狭かった自分に対して神が定めた運命なのではないか。
そうであっても無くても、そうする事が自分に残されたただ一つの救いの道に違いない。
だが、やはりその先に待つ死は怖い。まるで頭の中が無限に続く

回廊を巡っているかのようだった。
いつしかレグラスは無限の回廊の催眠によってか、ウトウトと眠りに就いていた。
こうした状況でも眠れるのは騎士としての心構えなのか、単なる田舎者の神経の太さなのかどうかは誰にも分からない。おそらく、レグラス本人にも分かっていないだろう。
窓の外には星空が広がり、その下には平和な村の屋根が連なる。
領主に対する最後の祈りを終えたラウンも詰め所へと帰り、村の家々に灯る明かりは段々と消えていった。
そして、彼ら――いや、全てのグランドール国民にとって最後の平和な夜が更けていく。
静寂が世界を支配し、そしてまた新しい朝が帰ってきた。

＊　＊　＊

一台の馬車が帰路を行く。
今朝、ハークスの村を出発した一行はメリアへと向かって走っている。
まだ、戻ってから行うべき課題が多く残っているとはいえ、ようやく自宅へ戻る気分だった。程度の差こそあれど、一同は帰路につく喜びを噛みしめていたのである。
出発から数時間、日陰で外界よりは若干涼しい馬車の中からようやくメリアの城壁が見えるようになった時のことだった。
メリアの上空で何かの群れがたかっていた。
それはカラスのように羽ばたいているが、カラスにしては遥かに大きい。
「またか！」
驚きと恐怖の入り交じったような声で、ラウンは呪うように叫んだ。そう、その群れを構成する怪鳥は、かつて彼らが領主の館で目にした魔物と同じ物であったのだ。彼はすぐさま怯む御者に鞭を入

れさせる。
突然激しく揺れだした馬車に気持ち悪さを感じつつも、一行はそれ以上の気味の悪さに身を固くしていた。
あの魔物は、昼間であっても屋外を自由に出歩くことが出来る。
ハークスの場合、領主がデュラハンを倒すために極秘裏に魔物を囲い、警護に当たらせていたので、人目に付かせないためにその行動を夜間に限定していたのだろう。
しかし、一度は悪魔と勘違いしていたこの魔物が、陽の光に弱いとされる悪魔と違って昼間も行動できるという事実、それに、これまでとは異なる行動を見せたことに、あの魔物はまだ隠れた力をいくつも持つ、悪魔以上に強力な存在なのでは無いかという想像を呼び起こしたのだ。
やがて馬車は城壁付近に辿り着いたものの、上空の魔物の群れはその数をどんどん増しているようにみえる。
ラウンが市門へ向けて馬車を走らせると、その市門の内から二匹の悪魔が姿を現した。
「まったく真っ昼間からご苦労さんだよね」
ファズは言うと、御者が馬車を大きくUターンさせて止めるタイミングに合わせてそこを飛び降りる。レグラスもその後に続き、二人は抜刀して眼前に迫る敵に向かった。
既にこの魔物とは大量の数を相手に戦った経験もあり、その攻撃パターンはもう二人の体にたたき込まれている。彼らに何か隠された力が無い限り、苦戦することはないだろう。
そして、魔物達が隠れた力を示すことは無かった。
ほどなくして二匹の悪魔は討ち取られた。
市門へと駆け寄ると、内部には信じられない光景が広がっていた。
通りに魔物が溢れかえっているのだ。
そして、かつて騎士や魔術師、僧侶であっただろう人の死体が幾つも転がっている。ここから見通すことは出来ないが、至る所で戦

闘が行われているらしく、ここ数日で聞き慣れてしまった、武器を打ち合わせる音や、肉の引き裂かれる音が、魔物達のキィキィという叫び声に紛れて無数に聞こえてくる。
「レグラス、こういう場合、俺達はどうすればいいかな？」
あまりの敵の多さに市門から先へ進めずにいるファズがいつになく焦った声で呟く。
最良の手段は近隣の村へでも助けを呼びに行くことだ。二人の騎士に、ラウンとリーフルが加わったところでここを突破することは容易では無いだろう。先日のような籠城戦とは勝手が違うのだ。
近隣の村に駐屯している騎士達の中には、この異変に気付いていない者もいるかもしれない。
そうでなくとも村人にさらに遠くへの伝令を頼むことができる。方法としては一番確実だ。
しかし、目の前で今も戦い続けている誰かがいるのに、それを見捨てて逃げることができるのか。今ここを離れたら、ハークスの村の時のようにまた犠牲者を増やしてしまうかもしれないのだ。
騎士としての自分は、確実な方法を取ることも、この身一つで敵に戦いを挑むこともどちらも正しいと教えている。
――どちらを取るかは、騎士としてではない本当の自分が決めなければならないのだ。
レグラスは数秒の沈黙の後に、言った。
「このまま行く。一人でも多くの仲間を救えたらいい」
これを聞いたファズは一瞬呆気にとられた後に聞き返す。
「正気か？　この状況では、救うどころか俺達が生き帰ることすら難しいと思うよ」
レグラスはファズの方を振り向きもせず、前だけ見つめて強く言った。
「オレは、生きる。生きて必ず帰ってみせる！」
ファズは呆れながらも、レグラスならそう答えるだろうと期待していた。そして、自分の背中を押してくれるだろうとも。

彼は満足げに頷くと、追いついたリーフルと共に三人で町の中へと飛び込んだ。
「リーフルさん、ラウンのオッサンはどうしたんだ？」
目の前に見える魔物を片っ端から切り払う。
「あの人は、馬車で周辺の村を巡ってみるそうです」
「なるほど良い判断だ」
リーフルはぶつぶつと呪文を唱えながら両腕を複雑に動かし、炎を作る。完成した炎はリーフルが手を振ると一直線に飛んでいき、一匹の魔物に命中してその体を消滅させた。
「お前の判断は間違ってはいなかったようだな」
ファズは攻撃の合間に横で戦うレグラスを見る。自分たちがどちらの判断をしたにせよ、ラウンは伝令の役に回ってくれたのだ。
だが、レグラスは返事もせずにひたすら斬っては走りを繰り返す。
いつしかレグラスが敵陣を崩して先へ進み、その後でファズとリーフルが後始末をするという構図が出来上がった。
初めは魔物も油断していたらしく、この無謀な突撃も十分以上の戦果を上げていたのだが、彼らはあまりに無謀だった。

町へ入ること数十分。三人は町の中央の噴水広場に立ちつくしている。見事に囲まれてしまったのだ。
倒しても倒しても魔物は次々と現れ、その数は減ることが無い。この広場には三人の他に二人の騎士がいた。――既に二人ともが帰らぬ人となっていたが。
レグラス達が駆けつける直前に魔物の一撃で絶命したのだ。そのうち一人は騎士団の中でも割と仲の良かった騎士だ。駆けつけてきたレグラスを見て一瞬気がゆるんだのだろう。
レグラスはその騎士の名を叫びながら、しかし無意識のうちに騎士の周囲にたかる魔物達を薙ぎ払った。
この時三人が気付くべきだった事は町の入り口側にも新たな魔物が回り込んでいた事だった。前に見える魔物達を全て倒した所で、

後ろから現れた新手に気付いたのだ。
「ここまでか……」
ファズが肩を落とす。魔物側も多少の知能があることは前に述べたが、彼ら三人の強さを分かっているらしく、周りを取り囲んでもすぐには襲いかかってこない。
だが、結果的にはそれが仇となった。
町の奥側の通りから、金属がぶつかる音――戦いの音が近づいてきたのだ。魔物達はこの異変に気付いたらしく、新手に邪魔されて機会を逃す前にとでも考えたか、捨て身で三人に襲いかかる。
戦い慣れた三人にはこの魔物は単体相手なら敵ではないが、何しろ数が多い。しかも、あらゆる方向からこちらへと向かってきているのだ。
「ファズさん、少しの間頑張ってもらえますよね」
リーフルがぼそりと呟いた。ファズが「えっ？」と振り向くと、リーフルは何歩か後ろに下がっていつも以上に真剣な表情で呪文を唱え、激しい手振りで魔力を練っている。
その間にも魔物は襲い来る。やむなくファズとレグラスの二人で応戦することとなった。
二人はリーフルを囲むように背中合わせの陣を組み、周囲の敵に当たる。ある程度の衝撃は覚悟した上で側面からの攻撃は鎧で受け、正面の敵を斬っては別の敵にあたる。
そうした事を続け、致命的な打撃こそ受けることは無かったものの、敵の数の多さに二人は所々に傷を負い、この壁を魔物が突破しかけた頃、
「二人とも、私の後ろに下がってください」
リーフルが大声で叫ぶ。
静かな雰囲気のリーフルから発せられた強い口調に少し驚きつつも、レグラスは周囲を取り囲む魔物達に牽制の一撃を加えると、大きくステップを踏んでリーフルの後ろへと下がった。同じくファズも後ろへ飛び退く。

それを確認したリーフルは、大きく両腕を振りかぶると腕の中で作られた魔力の結晶体を勢いよく敵に向けて投げつける。
どうやら広範囲に渡る魔法のようで、リーフルは標的の一番多い町の入り口へとつながる中央通りを狙う。この狙いは逆方向から近づく仲間と思われる一隊を巻き込まないためでもあった。
その効果は魔法が彼女の腕から離れた瞬間から現れた。
腕の中の魔力の結晶体は彼女の目の前で大きく広がると、そのまま一直線に市門を貫いた。
激しい衝撃波が周囲を襲い、光が視界を進む。
魔力の拡散が収まり、その効果が終わりを告げると、リーフルは苦しそうにしゃがみ込んだ。
「まだ、私にこの魔法は難しかったみたいですね」
彼女の目の前から市門に至るまで、一直線にえぐれた地面があり、そこにはあれだけいた魔物の姿が一切見あたらない。さらに、魔法は城壁にまで巨大な穴を開け、そのしばらく向こうまでえぐれた地面が続いていた。
彼女が昨日、魔法生物には一番効果的だと語っていた、分解消去の魔法だ。その表情からすると、魔法の発動は完全では無かったようだが、それは効果範囲の制御が上手くいかなかったということか、あるいはもっと強力な破壊力を引き出せたということか、それは分からなかった。
しかし、その不完全な威力でさえ魔物を怯ませるには十分であった。動物的な本能からか、魔物達は後ずさって様子を伺う。
余裕が出来た三人は、町の奥の通りから聞こえていた戦闘音が段々と途切れがちになっている事に気付いた。
苦しそうにうずくまるリーフルをファズが抱きかかえ、魔物が退いた隙に背後のその通りの様子を伺う。
すると、どうやら戦闘音の減少は見知らぬ仲間の敗北ではなく、彼らの勝利を意味していたらしく、いくつかの人影がレグラス達三人の方へと駆け寄ってきていた。

魔物達もようやく正気を取り戻したらしく、レグラス達へと再度襲いかかろうとする。
「町の外へ出ろ。生存者はもういない」
朗々とした良く通る声で、こちらへ駆け寄る人影のひとつが叫んだ。
レグラスとファズはその声に聞き覚えがあった。二人は頷き合うと、立った今リーフルが描いた地肌の上を走って入り口を目指した。
このとき疲労で動けないリーフルを背負ったファズはまともに戦うことができず、実質の戦力はレグラス一人。
隙だらけのこの三人に、魔物達は翼をはためかせながら追い迫る。
だが、魔物達にとって不幸だったのは、この三人に気を取られて新手に背中を向けたことだろう。
新手のリーダー格と思われる、使い込まれた騎士の鎧に身を固めた壮年の男は、魔物の群れに追いつくと手にした剣の重さを物ともしないかのように振り回し、次々と魔物達を薙ぎ払った。
例のデュラハンほどではないが、この男も相当の手練れである。レグラスはもちろん、さすがのファズでさえ彼には及ばぬだろう。
その後に続く五人の騎士もこれに習い、魔物を相手に剣を振る。この騎士達はお世辞にも手練れとは言えないが、レグラス同様この状況を生き残ってきただけあって慣れた手さばきである。
さらにその後から、二人の騎士と、その一人に背負われた老人が現れる。
「ほれ、こら、そんなに揺らしては腰を痛めるであろう」
老人は自分を背負う若い騎士へしつこく文句を垂れている。
「フン、魔術師風情が……、どうせ、この忌々しい魔物達も、お前らの……、はあ、ハア」
もう一人の何も持たずに走る騎士は魔術師への文句を垂れているが、息切れが激しくて聞き取ることができない。
鎧が無ければ騎士とは分からぬほどにでっぷりと太った中年男、走ればすぐに息切れしてしまうのも無理はない。

「これ、これ、速度をゆるめたら後ろが追いついてしまうではないか、少しは考えたらどうじゃ」
遅れがちな中年騎士に合わせて速度をゆるめた騎士に対し、老人はそう言うと、片腕を高く上げて手首の先をぐるぐると動かした。
すると、老人の手の中に炎が生まれる。そのまま、老人は振り返りもせずに炎を後ろに放り投げると、炎は慌ててしゃがみ込んだ後ろの中年騎士を乗り越え、ものすごい勢いで地面を走り、数歩進む程の時間で背後に迫っていた魔物達を塵に変えた。
さらに、この炎は威力こそ徐々に弱まってはいるものの、次々と魔物へと燃え移っていく。
だが、建物などに引火することは決してない。なぜなら、彼がそういう風に作り上げた炎だからだ。
二人の騎士と一人の老人は先を急ぐ騎士達が開いた道を通って市門へと急ぐ。彼らが市門に辿り着く頃には、町の中にはレグラス達が踏み込んだ時とさほど変わらない量の魔物がもう群れていた。
先ほどはあちこちで聞こえていた戦闘音はもうどこからも聞こえない。

レグラス達三人が市門を出て、しばらく走っていると、丁度ラウンの馬車が戻って来た所に出会った。
しかし、その馬車にはラウンと御者以外の人物が乗っている気配はない。また、後続の何かが居るわけでもなさそうだ。
「オッサン、応援を頼みに行ったんじゃないのか？」
馬車が三人の姿を認めて止まるのを見計らい、ファズが尋ねる。
「それが、どの村の騎士も既にメリアへと向かったらしいのだ」
ラウンはすっかり落胆した表情を見せる。
「村人に聞いたところ、どうやら他の村にいた騎士達も大部分がメリアへと戻っていったらしい」
おそらく襲撃はだいぶ前からあったのだろう。周囲の村々に駐留していた騎士達は勇敢にもこれへ駆けつけ、そして散っていったの

だ。
「メリア地方騎士団の力を持ってしても奴らの侵攻を防げなかったというのか……」
レグラスは悔しそうに肩を震わせる。
彼の脳裏に、自分の姿を認めて嬉しげな表情を浮かべながら絶命した騎士の姿が浮かぶ。溢れ出そうになる涙を押しとどめる。悔しさと悲しさに押し潰されそうなのは自分だけではない。
その時、背後から声がかかる。
「早め早めに手を打ったのが裏目に出たようだな。
メリア地方騎士団は我々を残して全滅だ」
先程の壮年の男――メリア地方騎士団長のロンバルトが四人の元へと追いついたのだ。
その後ろには、五人の騎士と副団長ルドルフ、そして魔術師学院の老魔術師ガルハヌスと、ファズとレグラスにとっては懐かしい顔が並んでいた。
「団長、カイゼルがやられちまった！」
騎士の中でも一倍大きな体を持ったいかにも力強そうな男が言う。
レグラスもこの男には何度か稽古を付けて貰った事がある。頼もしい先輩だ。その彼も今は満身創痍で疲労の色を濃く滲ませている。
カイゼルという騎士をもレグラスは知っている。決して積極的な方ではないが常に周りのフォローに回るような人物で、周りへの気遣いが良くできる男、と感じていた騎士だ。
おそらく、彼らの脱出を助けるためにその命を捧げたのだろう。
「また一人、やられたか」
ロンバルトはメリアの方を振り返って目を伏せる。
「市民は今も魔物の恐怖に怯えているというのに、我々は何もできなかった……」
ロンバルトの剣術がいかに素晴らしくとも、無数に沸いてくる魔物を相手にしてはどうしようも無かった。それは本人も分かっていることだろう。

だが、彼の部下達の大半を彼は救うことが出来なかった。それだけが事実である。
年の功か、見た目には落ち着いて見えるが、その心の底では後悔と懺悔の嵐が吹き荒れているに違いない。
「団長、”今も”とは？」
馬車にリーフルを寝かせて馬車を降りたファズがこれを聞いて尋ねる。
あの魔物にかかれば民衆の命などひとたまりも無いに違いない。
――それこそ、ハークスの村人達のように。
「あの魔物は、民衆には手出しをしていないのだ。
ただ、奴らに敵意を見せた者だけが命を奪われている」
ロンバルトはあくまで声を荒げることなく、静かに言う。その口調が却って彼の悲壮さを際だたせていた。
彼は、魔物の侵攻を知るや迅速にその対処に当たったのだろう。そのために騎士団のほぼ全てを失っている。
そして、それだけの部下を失ったにも関わらず、自分だけが生き延びていることに憤りを感じないような男ではない。
――副団長のルドルフならば、保身に必死でそんなことは考えていないのだろうが。
「まさにボディガードだな。しかも、守る対象は侵略した町ときたか」
ラウンは言う。ハークスの村の事件でも魔物は領主を守るために生み出されていた。
「あれほどの数じゃ、そこらの魔術師の仕業ではないわい」
騎士の背中から地面に降りたガルハヌスも相変わらずのしわがれ声で話し始める。
「あの軍勢の後ろに誰かが立っておる。そして、そやつは何か大きな目的を持っているに違いないわ。
ヒッヒッ。面白くなってきたの」
そこまで話すと俯いてクックッと笑い出す。これを見た騎士達は

一瞬殺気立ったが、ロンバルトの「ガルハヌス殿はこういう方だ」との一言で渋々心を落ち着けようとする。
確かにこの老人は一見、この憂うべき事態を楽しんでいるように見えたが、それはよく見るとどこか寂しげな笑いに思えた。
レグラスには、偏屈な彼の気持ちがほんの少しだが理解できる気がする。
彼もまた、大切な何かを守ることができなかったのではないだろうか。

＊　＊　＊

レグラスとファズ、そして五人の騎士にメリアへ向かう騎士を見つけたら王都へ行かせるよう命令し、騎士団長ロンバルト、副団長のルドルフ、魔術師ガルハヌスの三人はラウンの馬車を借りて王都へと向かった。彼らには国への報告という上役としての義務があるのだ。
ラウンとリーフルは彼らとの相談の後、自由意志でその場に残り、レグラス達の手伝いをすることになった。
生き残りの騎士を探すと言っても、もうそれほど残っていない数人の騎士を虱潰しに探すのも無理な話だ。
一行は二手に分かれて南から西へのルートと東から北へのルートを取り、近隣の村へここを通る騎士に詰め所の伝言を見るよう伝え、詰め所にはこれまでの経緯とこれからの行動などを書いた手紙を用意しておくことにした。
前者のルートは五人の騎士、後者のルートはレグラス達四人の担当となり、それぞれの任務のために旅立った。
まずはほとんど南に近い村から、東の村々を回りつつ北へと、レグラス達は任務を無難にこなしていった。
ある村では、たまたまメリアへと駆けつけようとしている騎士に

出会った。
男は、自らの体の限界を超えているのでは無いかと思うほどの疲れきった形相でメリアへの道を歩いていたが、レグラス達の姿を認めると安心したようにその場に倒れこんでしまった。
おそらくメリアからの応援要請だけでなく、周囲でさまざまな噂を聞いたのだろう。騎士団全滅といった噂すら聞いたかもしれない。それを示すようにどこの村にも騎士がいないときて、彼は心配のあまり休むこともなくずっとメリアへの道を歩いていたのだろう。
ようやく見つけた仲間に安堵し、「メリアは無事であったか……」と呟く彼を前にレグラスは一言、「メリアは落ちた」と言い捨てた。
男の顔が一瞬にして凍りつき、しばらく時間を置いて先ほど以上に疲れ切った表情へと変わる。
「メリアは落ちぬ。私達の騎士団は無敵ではないか……」
男は声にならない声で叫ぶと、よろよろと立ち上がって歩き始めた。が、すぐに倒れかかり駆け寄ったファズに支えられる。
だが、男はファズの手を振り解いて再びよろよろと歩き出す。
「もしもメリアが落ちたのならば……、私も共に死ぬのみ」
もはやうわ言のように呟きながらメリアを目指して歩いていく。その行く手をレグラスが遮る。
レグラスは男の正面に立つと、いきなりその顔面に拳の一撃を食らわせた。
男は吹っ飛び、地面を引きずりながら後ろに倒れる。呻き声を上げてはいるが、今の衝撃で命にかかわるようなことは無いだろう。
レグラスは男を見下しながら呟いた。
「それじゃあ、何の意味も無いんだよ」
男はしばらく倒れたままの姿勢でいたが、頭を抑えながらゆっくりと半身を起こすと、地面に座ったままの格好で涙を流した。
「王都で団長が待っている。必ずそこでまた会おう」
レグラスはそれだけ言うと、背中を向けて次の村へと歩き始めた。
後続の仲間たちはしばらく呆気に取られていたが、男の様子を遠

目に気遣いつつも、レグラスについて村を出た。
そして、メリアに一番近く、また北のフィアンへの街道沿いにある村にまで来てひとまず彼らの任務は終わりを告げた。

王都グランへの道の途中にある商業都市、フィアンまでは歩いて四日ほどの距離があったが、噂の伝達はどうやらレグラス達よりも早いらしく、前へ進むにつれてより不吉な噂が彼らを取り巻いていった。
聞くところによると、メリアが落とされてから間もなく周辺のいくつかの小都市も落とされたらしく、どうやら確実に魔物の侵略は進んでいるらしい。
そのせいか、村によっては住人のほとんどが避難してしまった所もあり、ひっそりと静まりかえった不気味な空気になっているという。
それを語ったある宿の老人は「先祖代々の土地を捨てるわけにはいかないよ」と笑ってレグラス達を送り出した。
実際、フィアンへとたどり着くと、そこは各地から集まった避難民であふれかえっており、噂が真実であったことをはっきりと物語っていた。
この都市ではいつになく物々しい警備体制が敷かれており、フィアン地方騎士団やその下で働く傭兵部隊が所狭しと歩き回っている。
まさかそこまでは想定して作られた訳ではなかろうが、こんな時にグランへの第一歩の町であり、また冒険者の町であるフィアンの存在は強い。
傭兵部隊には次々と志願者が現れるし、グランへと赴く不審者はここでストップをかけられるからだ。しかし、この状態もレグラス達にとっては全く迷惑な話で、フィアンの市門では長い検問を受け、おまけに宿屋はどこも一杯になっていて泊まれない。
結局ラウンの口利きで神殿の一室を借りられる事になったが、――まったくラウンには世話になりっぱなしだ。

「予想以上に事態は切迫しているみたいだね」
ファズが言う。今四人が居るこの広場でも、戦況を語る情報屋やそれを聞いて恐怖に震える町民、そして次なる行動を決める冒険者達など、数分おきに全ての人間が入れ替わっているのではないかという程に慌ただしい。
平時であれば見られるはずの果物屋や古道具屋などといった屋台も今日ばかりは姿を見かけない。
商売にならないと思って休んでいるのか、はたまた混乱の予兆を感じてどこかへと旅だったのか。
穏やかな午後の陽気が広場を包んでいるというのに、その下では殺気だった民衆や冒険者達が次から次へと訪れる情報に耳を澄ませていた。
そこへ、一人の情報屋が新たな情報の到来を叫びながら走ってきた。あの侵略者達にまた何か動きがあったらしい。
「おい、今度は何が起こったんだ？」
レグラス達の目の前でいかにも冒険者らしい、熊のような体格の男が情報屋を呼び止めて尋ねる。
「おっと、兄ちゃん、情報をただでもらおうなんて大人のすることじゃねぇなぁ」
情報屋はさすがに上手い。高すぎず安すぎずといった額を指で示しながら言う。
「それとも、他の誰かが払ってくれるのかい？」
周囲には幾人かの市民や冒険者がいたが、この男が情報料を払う物と信じて財布のひもをゆるめる気配は無い。
「クソッ、お前ら。――ほら、持ってけ。畜生」
気が短いのか、周囲の期待に応えざるを得なかったのか、男は叩きつけるように言われたとおりの金額を払う。
「毎度あり。
さて、それでだ。聞くところによると、ついにここフイアン以南の名だたる都市が全て侵略者の手に渡ったらしいぜ」

情報屋は声をひそめて言う。レグラス達もこの情報には思わず耳を傾けていた。
「まさか。メリアだけでなくカティアやルーンズまでもが落とされたというのかあ？」
熊のような男が素っ頓狂な声をあげる。
ちなみに、カティアやルーンズといえば、フイアンからの街道が通じている、それぞれメリアと同じかそれ以上の大都市だ。
「フン。貴様に誘われて傭兵家業に手を出そうにも、これは負け戦ではないか」
誰かが男に声をかける。よく見ると、熊のような男の影に隠れて、背は低いが体格の良い樽のような男が立っている。
大都市ではそれほど珍しく無い、ドワーフと呼ばれる種族だ。
彼らの集落は洞窟の中で生活していると言われるが、レグラス達にとっては町の片隅で繊細な細工品を売る頑固な職人のイメージが強い。
「まったくガントの言う通りだ。負け戦どころか、このままでは国から出ることすらままならないじゃねえか」
熊のような男が言う。一応付け加えておくが、この男は体は大きくとも紛れもない人間であり、北に集落を作っていると言われる巨人族の類ではなさそうだ。
ガントと呼ばれたドワーフはぶつぶつと悪態をついていたが、その様子を見た情報屋が付け加える。
「兄ちゃん兄ちゃん、負け戦と決めつけるのはちぃと早いんじゃないの？」
何、と熊男が反応すると情報屋はキョロキョロと周りを見渡してから、指で数字を描く。男は舌打ちをしながらも追加の金貨を情報屋に渡す。
情報屋はさらに声をひそめて小声で言う。というのはどうやら情報の希少性を匂わせるための演技のようで、実際にはレグラス達にも聞こえるぐらいの声だった。元来声の大きい方の人間らしい。

「こいつは内緒なんだけどね、――侵略軍が従えているあの悪魔、段々と数を減らしているみたいだぜ」
そこまで言うと、周囲の困惑する表情を楽しむように眺めてから先を続ける。
情報屋にも色々あって、純粋に金を取ることを目的とする者もいれば、報道すること自体に命を賭けている者もいる。この情報屋は後者のようで、合間合間に取る情報料さえ手に入れば、金を払った当人以外に情報が渡っても構わない、いや、それが渡るまでもなく、周囲にも聞かせることを目的としているかのようだ。
「魔術師学院でちょこっと聞いてきたんだけどな、あの悪魔は魔法で生み出された生物らしい。魔術師というのは魔法で悪魔を生み出すたびに疲労していくんだとよ。
おまけに、奴らと戦った連中に聞いてみるとどうやら個体の戦力は小さな物らしい。生命力は強いが、動きはあっさり見切れるんだと。
そんな状況で、奴らは数に物を言わせた攻め方をしている。――いずれ魔術師の体力が尽きて生産が追いつかなくなるって寸法さ」
情報屋は自分の知識をべらべらと熱っぽくまくしたてると、周囲にあごで情報料を催促した。今までと違い、具体的な金額を示さないのは、これ以上の情報を持っていないことを示している。つまり、今までの情報に価値を認めたならば金を払えという事だ。周りから金銀の貨幣が情報屋に向けて投げ込まれる。
レグラス達も持っていた金のいくらかを投げ、熊のような男もまた渋々と、今度は銀貨を投げると、しばらく考え込んでしまう。
その間に、情報屋は店じまいと言わんばかりに報酬を拾い集めるとその場から走り去り、やがて人だかりも解けていく。
残った男とドワーフはその場でぼそぼそと会話を続けているようだ。
「しかし、あの情報屋の話は信用していいものかな？」
誰にともなくラウンが呟く。とはいってもリーフルに向けた質問

であることは間違いないが。
「確かにあの情報屋の推測は正しいと思います。
――しかし、敵が人間の魔術師とは限りませんから」
リーフルもそれを察したか、質問に答える。
「エルフ族などの異種族の方々は我々とは違った形でより強力な魔法を使えますし、伝説に語られる異界の魔王などは無限の魔力を持つと言われています」
確かにそういった伝説はよく耳にする事があったが、割と多くの種族を見られるこのグランドール王国でも、エルフは滅多に見ることは無く、ましてや異界の魔王などを目にする機会は全く無い。
まさか敵がそのような軍勢とは想像し難かった。
「ああ、話を聞く限りは五分五分だなあ」
ファズが気の抜けた声で言う。おそらく彼もエルフや異界の魔王が敵などとは思っていないのだろう。
「さすがにフィアンのこの軍を突破できるほどの魔物は現れないと思うけど」
周囲で相変わらず警備を続ける騎士達を横目に呟き、少し市内を見回りたいと言って彼は商店街の方へと歩いていく。
「確かにここも気がかりだが、まずは上官への報告が先だろう、レグラス」
レグラスの様子を見てラウンが言う。彼の予想通り、レグラスにはこの軍勢の中に入って共に戦いたい気持ちがあった。
これだけの人数の中、自分一人の加勢で何かが変わるとはとても思えないが、考えてみれば集団はそもそも個人の集まりであり、一人一人の力が大事になるはずなのだ。
しかし、ここでレグラスが参戦してしまうと、ロンバルト団長への報告が途絶えるか、あるいは今までの仲間と別れることになる。
ラウンとリーフルの二人は最初はただの協力者としての仲間ではあったが、今では信頼しあえる仲間である。
もっとも、リーフルとは相変わらず上手く話すことはできていな

いのだが。
しかし、仲間としての深い絆を感じているこの二人とは別れたくない。レグラス個人の心の声が騎士の心というフィルタを越えてレグラス自身へと語りかけてくるのだ。
思えば初めてファズと戦い、敗れたときもレグラスは騎士とでは無くレグラス個人の心としてファズの事を憎んでいた。
あの時は騎士の心で自らを正当化していたが、今は違う。
騎士の心は意識しても、自分自身の心をもさらけ出していきたい。
この仲間達と別れずに、かつ騎士として為すべき事、それはこれまでの旅路と、このフイアンの現状をロンバルト団長に報告することだ。
当然王都とフイアンの間では情報の交換は何度も繰り返されているだろうが、レグラス達の意見が役に立たないことは無いだろう。
そして今は、メリアの時のように目の前の仲間を助けるかどうかの差し迫った選択ではなく、目の前の戦いに参加するかしないかを選ばされているのだ。
戦い死に急ぐことだけが騎士の役目ではないし、ましてや人の定めでも無い。自分はもっと大きく周囲を見渡さなければならないのかもしれない。
「明日の朝、一番にグランに向かおう」
レグラスは、目の前の戦いには参加しない事を決めた。
やがて、騒がしい町の一夜が明けると、神殿から一台の馬車が王都グランへと向けて走り去っていった。

＊　＊　＊

王都グランの周囲は広大な農業地帯となっており、街道を歩けば畑と町とを交互に眺めることになる。
この辺りは北の大山脈の影響で高地になっているため、野菜などの生産が盛んなのだ。グランで栽培された東洋キャベツやナス、そ

れにトマトなどはどれも近隣諸国の間では有名な食材である。
リーフル曰く、グランのトマトは甘みが強くてとても美味しく、煮込んでスープにすれば絶品なんだそうだ。
レグラスとファズはその話を聞いて唾液を飲み込んだが、リーフルが料理好きという事実に息をのんだので唾が器官に入ってむせてしまった。
「もうすぐ夏ですから、美味しいトマトが出来ます。――じゃがいも、にんじん、なすにピーマン。どれも色んな料理ができて、とっても美味しいんです。
そうです、じゃがいものケーキって凄く美味しいんですよ。それから――」
どうやら趣味の事を話し出すと止まらないらしく、彼女は道中延々と喋り続けた。リーフルがこれだけ熱っぽく話すのを見るのは初めてだった。きっと美味しい料理を作るのだろう。
そうしてのどかな街道を馬車で一日と半分ほど走ると、段々と周囲も建物の割合が増え、やがて堀と巨大な城壁に囲まれた王都グランが見えてくる。
その壁は端が見えないほど長く、辛うじて微かに見える監視塔がその距離を示している。
レグラスの記憶によれば、この監視塔は四角形に作られた王都の城壁の四隅にあり、それぞれ王の近臣達の指揮下にあるという。

やがて馬車は城壁の南門へとたどり着く。
検問を通ってこの城壁の中へと入ると、そこには複雑な通路で仕切られた城下町が広がり、その向こうには国王の住まう王城が見える。
王都グランの外壁には東門、南門、西門の3つの門があり、王城はやや北寄りの中央に配置されており、南門はほぼその真正面にある。西門は南寄り、東門は北寄りにあるが、地理的な状況からすると東門が一番王城に近いと言われている。

仮にも貴族の子息であるファズはどうだか知らないが、レグラスにとっては初めて訪れる首都だ。こんな状況下での参上とはなってしまったが、初めて見る首都の華やかさにレグラスは思わず目を奪われていた。

「あんまりキョロキョロするなよ、田舎者丸出しじゃないか」

ファズが思わず嘆いたのも無理はない。

城下町は、これが流行のファッションとでも言うのか、男女ともにきらびやかな衣服に身を包んでおり、フィアンで見られたそれとはまた別の上品な活気に満ちあふれていた。

フィアンは宿屋に武具屋、そして酒場が建ち並び、冒険者達や商売人の熱気に満ちた、どちらかといえば戦場のような雰囲気であるのに対し、この町は優雅な料理店や宝石店、服飾店などが目立ち、通路の一部に作られたテーブルでは貴婦人が談笑している。

時折騎士とおぼしき姿の者が走り回っている様子を見かけるが、これは恐らくレグラス達と同じ地方からの伝令に走る者であろう。

この様子から推測すれば、ここ王都グランではフィアンに比べると事態をあまり重く見ていないようだ。

初めはただただ品のある風景に目を奪われ、何も考えられなかったレグラスだったが、このことに気づき始めると、悠々とした王都の民に段々と苛立ちが募ってくる。

思わず愚痴のひとつもこぼしたくなってくるが、その頃には王城の手前にそびえる城門にまでたどり着いており、取り次ぎの兵が近づいていたので控えておくことにした。

その兵にラウンが用件を伝えると、彼はしばらく傍らの小屋で待つようにと、一行をそこまで案内してから城内へと消えていった。

小屋の中にはちょっとした椅子と机がおいてあり、近くの書棚には法典や聖書など、とりあえず暇が潰せるようにといった書籍が置かれている。

そんな本を手に取る気にはなれず、小屋の入り口から外を眺め、始めての王都に思いを馳せてみることにした。

王城の周りは堀で囲まれており、その内側を囲むように城壁が築かれている。
その城壁の中にはこの小屋を初めとしたいくつかの塔や建築物があり、それらに囲まれて国王チャールズ一世がおわす王城がそびえ立っていた。
王城は長さの違う巨大な円筒と立方体とをいくつも組み合わせて並べたような形状をしており、それぞれの円筒の上には丸味を帯びた円錐の屋根が乗っかっている。そしてその経年変化で灰色味を帯びた白い壁面には華麗な古代絵画の紋様がいくつも彫刻されていた。
「さすがだなあ」
レグラスはすっかり感心していた。
以前ほどではないにしろ、レグラスは騎士としての心構えを常に意識している。それによれば騎士にとって君主は絶対的存在であり最高の礼を奏する相手であるという。
今まで絶対的存在とは意味が分からず、ただ「国王とはもの凄い存在であるから従わねばならない」といった曖昧な認識しか持っていなかったが、この居城を見るに、国王の存在がいかに大きいかをはっきりと知ることができた。
――騎士にとってもっとも大きな存在。
まさか国王に拝謁する機会は無いだろうが、レグラスはその存在の近さに心を高鳴らせていた。
ただ型通りの教えではなく、こうして間近に国王を感じることで心の底から彼の存在を敬えるようになったのだ。
ついこの前までのレグラスが追いかけていた、本当の騎士らしさというものは、こうして徐々に身に付いていくのだろう。背伸びしても仕方がない。
ほどなくして小屋に先ほどの取り次ぎの兵が一人の男を連れて戻ってきた。
「団長殿、ご無事で何よりです」
まず口を開いたのは取り次ぎの兵とも会話していたラウンだった。

「ラウン殿も二人をよく連れてきてくださった。感謝する」
取り次ぎの兵に連れてこられた男――ロンバルトが答える。
これはレグラスの勝手な願望かもしれなかったが、団長にはこの王城の偉大さが、メリアなどという地方都市よりもふさわしいように思えた。
「なに、私など何もしておりませぬわ」
ラウンは謙遜する。こういった言葉の掛け合いはいつの時代も儀礼的にあるのだろう。実際にはラウンがいなければこの旅は困難を極めたに違いない。
「ファズとレグラスも、よく戻ってきてくれた」
ロンバルトは感慨深げに言う。彼のみならず周囲が影ながら目をかけていた二人だけに、メリア陥落後もこうして行動を共に出来ることには先輩としての喜びがあるのだろう。
もちろん、人としても優れているこの騎士団長は、たとえ二人が他の無名な騎士であっても、その名を呼び、同じように本心から喜んだに違いないが。

その時、城門に向かって一頭の騎馬が走り込んできた。騎乗の騎士は激しく傷付いており、所々へこんだ鎧やだらりと垂れた片腕が激しい戦いの後を伺わせる。
またその馬の疲労も激しいものと見え、騎士の鞭にも速度をあげようとしない。
城門の中程までに至って騎士が馬の歩みを止めると、馬は疲労の限界に達したのか横倒れに倒れ込んでしまう。騎士は辛うじて地面に飛び降りたものの、全身に負った傷は深いらしく、立ち上がれずに腰を落としてしまう。
近くにいた取り次ぎの兵が慌てて彼の元へ駆け寄る。
「あれは、アロール殿では無いか？」
その光景を見ていたロンバルトが理解しがたい疑問を口にするかのように呟く。ファズやラウンも同じように信じられないといった

表情で騎士の方を見ている。
――リーフルだけは相変わらず、興味がないのか小屋の奥で大人しく座って読書をしていたが。
レグラスが聞き覚えのない名前に事態が飲み込めずにいると、隣でファズが呟く。
「アロール団長。フイアン地方騎士団の団長だよ」
「何だって？」
まさに今魔物との激闘をしているはずのフイアン地方騎士団。その大将であるアロール騎士団長がこんなところへ現れるということは、ただ事ではない。
無事勝利したとの知らせか、苦戦の末の援軍要請か、あるいは敗残兵としてか……。
騎士に駆け寄った兵はしばらく何かやりとりを交わしたらしく、大慌てで周囲の兵に彼の介抱を頼むと、こちらの方へ駆けてきた。
「ろ、ロンバルト団長、申し訳ありませんがご同行願えますか？」
この取り次ぎの兵は明らかに平静を失っている。さっきまでは健康的に職務をこなしていたその顔も今は真っ青だ。
アロール団長のもたらした報告がレグラスが想像した中での最悪の事態であることはどうやら疑う余地が無さそうだ。
「ということだ、ラウン殿。済まないが私の部屋で皆と待っていてくれないか？」
ロンバルトは答える。彼もまた聞くまでもなくアロールの報告内容は分かっているのだ。
それから、ロンバルトは思い出したように付け加えた。
「私の部屋は王城の二階にある。途中までは案内しよう。付いてきなさい」
それだけ言うと真っ青な取り次ぎの兵をなだめるようにゆっくりと王城へ向けて歩き出した。
その後にラウンが続き、レグラス、ファズ、そして思い出したように立ち上がったリーフルが続く。

一行はそのまま王城の扉まで歩き、そこでロンバルトは衛兵の一人に案内を頼むと謁見の間へと急いだ。
ロンバルトには王城内に私室を持っているが、これは国王チャールズ六世が、彼を近衛騎士団に招致したいが為に、近衛騎士と同等の私室を与えたことに由来している。
王城内に私室を持てる近衛騎士というものは騎士団中でもえり抜きの騎士に限られており、尤も位の低い近衛騎士と大差ない地位である地方騎士団長に対しては破格の待遇であることは言うまでもない。
ただ、それにもかかわらずロンバルトは堅く丁重にこれを辞退し、しかし彼の王城内の私室も彼以外の誰かにあてがわれることなく、今日の日を迎えるまで使われることが無かった。
非常事態とは言え、その部屋が使われているという事は、彼は近衛騎士の誘いを受けてしまったのではないか。団長はそういった点で義理堅い人物である。
今は敵の手に渡ってしまった都市とはいえ、我らがメリアの誇るロンバルト地方騎士団長がいなくなってしまうのは部下のレグラスとしては少し寂しい。
衛兵の案内で辿り着いたロンバルトの部屋には既に先客がいた。
――メリア地方騎士団副団長のルドルフと魔術師のガルハヌスだ。
当然ながらこの二人は会話が合わなかったらしく、不機嫌そうに部屋の端と端に離れて座っており、部屋に入ったレグラス達を見ても関心が無さそうに一瞥を送ると、すぐに目をそらした。
レグラス達は気まずい雰囲気に困惑しながらも、とりあえず部屋の中央あたりにある机の周りの椅子へと腰を下ろした。
部屋の中にはこの机と椅子の他に、ガルハヌスが腰掛けているベンチのようなものがあり、またその反対側にはルドルフがもたれかかっている出窓がある。
それ以外には鎧を掛けるための人形やら豪華な壺やらといった、こういった部屋にありがちな物がある程度の、至って普通の王城の

一室だ。
「フイアンすら落とされるとはな」
ひとまず部屋に入った物の、ルドルフとガルハヌスの間に漂うきまずい空気に押しつぶされそうになった頃、ラウンが耐えきれなくなったように呟いた。
「ふん。我らメリア地方騎士団ですら勝てぬ相手に、フイアンのへたれ騎士や蛮族冒険者共がかなうわけがないわ」
その呟きを耳にしたルドルフは当然だというように言い放つ。
「ヒッヒッヒッ。目の腐った副団長にはそう見えたかい。
わしはようやく敵の本隊が動いたとみたがね」
ガルハヌスもそれを受けて言う。どうやらこの一言でルドルフの目にますます怒りの色が宿ったようだ。
だが、そもそも、メリア地方騎士団の実力はレグラスも信じているが、それはこの男の実力ではなく、むしろ足を引っ張っていたと言っても過言ではない。その彼が胸を張って騎士団の実力を主張する事は理解しがたかった。
「本隊？」
レグラスが老人の言葉を復唱すると、意外にもリーフルがそれに答えた。
「私たちは侵略者が”あの魔物”であるという幻想に捕らわれすぎていたのかもしれません。
魔物を操る魔術師だけでなく、その周囲により強力な魔物や騎士団が編成されている可能性もあったわけですから……」
「そうじゃそうじゃ、リーフルはよくわかっとるわいヒッヒッヒッ」
老人は意地悪く笑う。
「しかし、気付くのが遅すぎました……」
リーフルは俯く。彼女自身には何の責任も無いのだが、どうやらフイアンでの自分の発言を後悔しているらしい。
「いや、まだ遅くない」
リーフルを励ますつもりなのだろう、ファズが立ち上がって言う。

「まだこの国は生きてるんだ。フィアンが落ちるとは思わなかったけど、おかげで敵の総力も掴めた。
グランの近衛騎士や生き残りの地方騎士団、それに傭兵部隊を結集させればまだまだ挽回のチャンスはあるよ」
両手を広げて力説する。その様子を冷静に見ていたラウンが淡々と話し始める。
「負け戦が続けば士気は下がる。おまけに今まではどう見ても敵のほうが一枚上手だ。
奴らはここを落とす新たな戦略ぐらい、既に用意しているだろう」
そこまで言うと、一同全員を見渡してから、先を続けた。
「それでも、私は最後まで戦うつもりだが」
レグラスやファズがそれに呼応する声を上げようとすると、ラウンは付け加えて言った。
「私はもう四十も半ばを過ぎた。人生七十年とはいえ寄る年波にはかなわん。国だの政治だのそんなものには興味がない。――ただのんびりと養生していたいのが私の夢だった」
真意を測りかねるその話題に全員が理解し難げな視線を送るが、ラウンはかまわず続ける。
「幸い私は過去にいくつかの栄光があったために、それを後ろ盾として司祭職で甘い汁を吸って生活していた。
面倒なことは適当に処理し、後始末は他の者にやらせた。他人の汚職は無関心で過ごした。
そうして腐っていきつつあった私を再び冒険に連れだしたのが、ファズとレグラス、そしてリーフル嬢だった」
ひととおりの身の上話を終えると、ラウンは大きく息を付いた。
「こんな状況で言うべき言葉では無いかもしれんが、ここまで君達三人と旅を出来て本当に楽しかった。
私は忘れていた何かを思い出すことが出来た。
――その恩返しに私が出来る事は何か、それを今考え付いたのだよ」

ラウンはレグラス、ファズ、リーフルの顔を一人ずつ眺めて言った。
「私は君達の意志を受け継ぎ、持てる力の限りを尽くして敵と戦う。代わりに、君達はここから逃げて、生き延びてくれないか？」
ラウンは静かに話を終えた。
その話を聞いたレグラスの心中ではひとつの葛藤が沸き起こっていた。
確かに、フイアンでの「五分五分」との予想はフイアンの陥落によってもはや四分六分、いや三分七分、あるいはそれ以下にまで落ちているだろう。そして、ラウンの行動は今までレグラスが繰り返してきた誰かを守るための行動よりも何より人間らしい意味のある行動に思える。
――だが、だからといってその申し出をあっさりと受けるわけにはいかない。
騎士として王国を守るために戦わなければいけないし、それ以上に、大事な仲間のラウンを置き去りにして自分たちだけが逃げおおせるわけにはいかないのだ。
「馬鹿なオッサンだな」
しばらく続いた沈黙を破ったのはファズだった。
「恩返しなら、道中さんざんしてくれたじゃないか。
それに、俺達にとってはオッサンだって大事な仲間だ。置いて逃げられるわけがないだろ」
ファズが言い終えると突然ガルハヌスが笑い出す。
「ヒッヒッヒッ。青臭い茶番を見せてくれるね。
王都より北は魔の大山脈、南は魔物の支配下だ。逃げると言っても一体どうやって逃げるんだい？
――戦うしか無いんだよ。ヒッヒッ」
その言葉にラウンは言い返そうと顔を上げる。しかし、その言葉を遮るようにレグラスは立ち上がって言った。
「ラウンさんの気持ちは嬉しい。だけど、私達がここから逃げ出し

たところで何も変わらないとも思います」
　レグラスは脳内で言葉をまとめ、少しずつ紡ぎ出していった。
「私は騎士でありたい。誰かを犠牲にして逃げ回ったり、任務を前に逃げ出すような事は決してしない。
　――それに、メリアでもフイアンでもその他の場所でも、多くの人達が悔いを残して死んでいったんだ。私は……、いや、オレは奴らを絶対許したくない」
　ラウンはため息をついた。レグラス達を説得することが不可能なのが分かったのだろう。
「だが、ひとつだけ聞いておく。リーフル嬢はどうするのかね？」
　ラウンは言った。あくまで仲間一人一人への気配りを忘れていないのだ。周囲が加熱している中、リーフルだけはどこか冷ややかな口調で、しかしこう答えた。
「構わないでください。私も、友や愛する人を思う心ぐらいは持っています」
　しばらくして、室内に現れたロンバルトの口から予想通りの戦況が伝えられると、レグラス達四人は迷うことなく彼に参戦を志願する旨を伝えた。

G492　ひとつの終わりと始まり　後編

それから数日経つと、グランドール王国の首都、グランにもかつてのフィアンのような騒乱が訪れていた。
戦乱を避け、家を捨てる者、家のために志願兵となる者、または何もかもを怖れて家にひたすら閉じこもる者。中には状況を把握できていないのか、それとも神経が図太いのか、敗残兵相手に商売をする者もいる。
敗残兵達はその商人達の誘いをふりほどきながら、王宮騎士団本部へと向かう。
検問の時に知らされるのだが、王宮騎士団本部で彼ら敗残兵の参戦志願受付をしているのだ。彼らは一律して傭兵部隊に編入される事になるが、この状況では文句を言う者は誰もいない。
レグラスとファズもこの傭兵部隊に配属されることになり、今は王宮騎士団本部控え室にいる。
先日ロンバルト団長から聞いた情報によると、軍議の中、敵が圧倒的な数の魔物を有していることや、またフィアンが出戦を仕掛けたところ敵の強力な騎士団によって返り討ちにあい、壊滅させられたことなどが報告された結果、最後の砦ここグランでの戦闘は籠城戦を決め込むこととなったらしい。
翌日にはそれを裏付けるかのような部隊編成が告知され、レグラスとファズの二人は東軍へ編入されることになった。
ラウンは神官部隊、リーフルは魔術師部隊へと配属され、今は別れ別れになってしまっているが、彼らも同じ東軍のそれぞれの部隊にいるため、決して気軽に会える訳では無いにしろ、近くにいる安心感は感じていた。
最も王城に近い東門を守るこの東軍には実戦経験のある敗残兵を中心に構成した傭兵部隊に騎士部隊、神官部隊、魔術師部隊とやや重点的に兵を配置し、それに加えて、騎士部隊、魔術師部隊で構成

され、国王自ら率いる南軍、規模は劣るが東軍とほぼ同じ部隊で構成された西軍が編成されている。
東軍傭兵部隊長には国王の側近の一人でもある最高部隊長のダイムが東軍総指揮官と兼任してついており、またレグラスやファズだけでなく、元メリア地方騎士団副団長のルドルフや、日に日に増えていく難を逃れていたメリアの仲間達などの見知った顔がいくつか含まれていた。
レグラスと部隊長のダイムとは一度だけ参戦志願の際にロンバルトに連れられて会ったことがある。
国王の側近の一人であり、かつての英雄であるという話から想像していた人物とは違い、それらの要素を辛うじて思い出させるような威厳は備えているものの、五十代中盤だというその顔は、ボサボサの髪と髭そして刻まれた深い皺に装飾されており、終始優しい笑みを浮かべた、気さくな初老の男といった風だった。
レグラス達に対してはロンバルトの推薦ということもあって特に好意的に接し、また二人がこれまで魔物と戦ってきた話に興味を覚えたらしく、その話をまたいつか聞かせてくれと言って別れた。
それ以来、今日に至るまで彼と話す機会は無く、その約束は一種の社交辞令に過ぎなかったものだったのだろうが。
ロンバルト団長は、その後チャールズ六世の熱烈な推薦があったらしく、正式に近衛騎士団の一員になると共に西軍騎士部隊の隊長を任せられることになった。
また、彼が近衛騎士になる条件として提示したのかどうかは定かではないが、西軍魔術師部隊長にガルハヌスが抜擢されている。
他に特記することとしては、ダイムと同じく三十年前の内乱から産まれた英雄である近衛騎士団長レイマンと宮廷魔術師ウェイカーが南軍でそれぞれの部隊を指揮し、ウェイカーの一番弟子であるドールが東軍の魔術師部隊を指揮し、リーフルはそこに所属している。
さらに同じく英雄である枢機卿ドレイクは、西軍神官部隊を指揮し、彼と共に二つの塔とまで噂されている大司教アデルが東軍を指

揮し、ラウンはこちらに所属している。
　これらの人々とはまだレグラスには面識が無く、ただの文字情報でしかないが、吟遊詩人達によって歌われている英雄達の存在をすぐ傍に感じられるだけでも気持ちは随分違うものだ。
　レグラスは自分に割り当てられた控え室のベッドに寝ころんでこの編成に登場する人物達への思いを巡らせていた。
　ファズも向かい側のベッドで暇そうに寝ころんで足をぶらぶらさせている。
　その時、控え室の扉がノックされた。この控え室は三人から四人を一組として貸し与えられているが、現在この部屋にはレグラスとファズの二人しかいない。おそらくこの部屋へと新たに加わる人間でも現れたのだろう。
　しばらくして、特に二人が入室拒否の声を発さないことを確認すると、扉が開いて使用人とその男が部屋へと入ってきた。
「相部屋となっておりますが、パール様はこちらの部屋をお使いになってください」
　使用人がそう言うと、パールと呼ばれた男が答える。
「む、案内感謝する」
　男はガシャガシャと音を立てながら部屋の中へと入ってくる。挨拶ぐらいはしなくては失礼だろうと思い起きあがって彼の姿を見たレグラスは思わずぎょっとした。
　その男は身長が低く、ドワーフほどの高さしかない。しかし、その割には上半身の体格が良く、身につけた鎧も人間のそれと大差ないサイズであり、その身長とは明らかに不釣り合いだ。
　一見人間の上半身だけが切断されて動いているようにも見え、レグラスは初め下半身が地中に埋まっているのではないかと錯覚した。
　だが、よく見るとその男は人間の上半身にサソリの姿をした下半身を持っている。巨大なサソリの頭の部分から人間の体が生えているといった図だ。ファズの方も思わず彼の姿を凝視していたらしく、二人の視線に気付いた男は挨拶をする。

「お初にお目にかかる。拙者、アンドロスコーピオンのパールと申す者である。以後、よろしくお願いする」
そう言うと、パールは丁寧にお辞儀をした。そして、部屋にある使われていないベッドのうちのひとつへガシャガシャと近寄ると、
「この場所を使わせて頂いても良いかな？」
と聞く。ファズが緊張に引きつった声で「いいですよ」と答えると、パールはかたじけないとまたも礼をして肩に担いだ荷物を降ろした。
一見その姿の異様さに面食らうが、よくよく見ていればこの男、レグラスよりは年上だろうが純朴そうな顔立ちをしており、見るからに分かる鍛え上げられた肉体からは彼が歴戦の戦士であることが伺える。
「拙者、このような種族の出ゆえに何かと偏見を持たれる事も多いが……、もし良ければ仲良くしてやってくださらぬか」
ジロジロと見つめる二人の視線を受け止めながら、パールがボソリという。アンドロスコーピオンという種族は伝説ですら語られない種族で、レグラスはその存在を聞いたこともなければ今までに見たこともない。
おそらく遠方の地に住む閉鎖的な種族かなにかで、訳あってわざわざここまで旅をしてきたのだろう。
「パールさんの種族って、一体どんな種族なの？」
ファズはもはやうち解けたかのように話しかける。この気さくさが彼のいいところだ。
「拙者の産まれたアンドロスコーピオンの里は、ここからずっと北東に行ったところの砂漠にある。拙者のように里を出る者は少なく、リザードマンの村との交易だけで生計を立てているような所だった……」
と、ここまで話すとパールは突然思い付いたように先を続けた。
「そういえば、ここには我々が自由に利用できる訓練場があると聞いた。拙者、このような窮屈な場所は苦手ゆえ、そこで話ついでに

お手合わせ願えぬか？」
　レグラスが返事に窮している事に気付く風もなく、ファズは「もちろん、いいですよ」とＯＫサインを出してしまった。
　どうも、この男の異様な姿が今まで戦ってきた魔物の姿と重なって見えて仕方がないのだ。決して悪い相手では無いことは分かっていても、どこか納得することができない。
　そうこうしている間にファズとパールは部屋に備え付けられていた木刀を手に取ると、部屋から出ようとしていた。
　多少の悩みは体を動かせば無くなるかもしれない、レグラスはそうプラスに考えることにして彼らの後を追った。
　レグラスが二人に追いついた時、パールが思い付いたように手を叩きながら言う。
「そういえば、そなたたちの名前をまだ聞いてはいなかったではないか。
　こうして同じ部屋となったのも何かの縁。拙者の話だけでなく、歩きがてらお互い成り行き話をするのはいかがであろうか」

＊　＊　＊

　ようやく体勢を立て直したレグラスは、人間の胴を薙ぎ払う要領でアンドロスコーピオンの首をめがけて木刀を地面と水平に滑らせた。
　だが、それより一瞬早くアンドロスコーピオンの下半身から伸びる尻尾がレグラスの右側から襲いかかる。この尻尾の先にはサソリと同じ毒針があるのだそうだ。まさか今それを使うことはないだろうが、一撃でも相手の攻撃を受けることは訓練では負けを意味している。
　レグラスは左に飛び退いてこれをかわす。飛び退きざまに振りかけていた木刀をその勢いのまま滑らせていくが、これは相手にかすりもしない。

武器を大きく右に突き出した格好で左に飛び退いてしまったレグラスの正面にアンドロスコーピオンが詰め寄る。そして彼は後ろ足で立ち上がると木刀を大きく振りかぶり、そのまま一気に振り下ろした。

「おお」

「強い……」

周囲の傭兵達が思わず感嘆の声を漏らしたのも無理はない。この異形の戦士は基礎的な剣術一切を身につけているだけでなく、さらにその肉体を活かした独特の戦い方を見せていたのだ。

初めて見るアンドロスコーピオンの戦いぶりに周囲の傭兵達は自らの訓練も忘れてただ呆気にとられて見つめる他無かった。

「おら、おら、どいたどいた」

そんな傭兵達を押しのけて、一人の男が怒鳴りながら現れた。まるで熊のような体格をした男で、革鎧の上からでもその下に分厚い筋肉が隠されていることが分かる。

男は他の傭兵達がそうであるように右手に木刀を持ち、また、怪我でもしているのか左の二の腕には包帯を巻いていた。

その後を追うように一人の小柄でしかし恰幅の良いひげ面の男が現れる。ドワーフだ。

間違いない、二人はフィアンの町でレグラス達が見かけたあの傭兵である。

熊のような男はそのままアンドロスコーピオン――パールの正面まで歩くと、木刀を構えた右手を前に突き出して言った。

「トーレスだ。お手合わせ願いたい」

パールは返事をする代わりに、木刀を正眼に構え直した。

二人はしばらくにらみ合ったまま静止していたが、やがて雄叫びを上げながら先に動いたのは熊のようなトーレスの体だった。

パールはその巨体の接近にも一切怯む様子は無く、同じように木刀を舞わせて敵の初太刀を防ぐ。

二人の剣先がふれ合った瞬間、互いに地面を蹴って後方へ飛び去

り、すかさず第二撃を加える――かのように見えたが、トーレスは木刀の切っ先を降ろして一言「互角だな」と叫んだ。
パールは一瞬呆気にとられたように相手を伺っていたが、すぐに自らも構えを解くと、満足げに頷いた。
周囲のブーイングを物ともせず、パールの元へと歩いていったトーレスは木刀を傍らに投げ捨てて右手を差し出しながら言った。
「改めてよろしく頼むぜ、サソリの兄ちゃん。名前は？」
レグラスはこの変わった決闘の様子を壁際で訳も分からずにただ眺めていたが、ファズがその表情を捕らえて解説を加えた。
「有能な戦士同士は、一度剣を合わせただけで互いの実力が分かるものなのさ」
言葉の意味は理解できても、理屈では理解できずに俯いて考え込んでいると、今までレグラスを照らしていた熱い日差しが突然遮られた。
ふと見上げると、すぐ隣にパールとトーレスがやって来ていた。周囲では再び他の傭兵達が訓練を初め、元の喧騒が戻ってきている。
「お前らがパールの連れだな。俺はトーレス。こっちのドワーフはガントだ。
この先何度か会うことになるだろうから、よろしく頼むぜ」
トーレスは右手を差し出しながら言う。レグラスとファズの二人は順番に名乗りながらトーレスと握手を交わした。
また、トーレスに紹介されたガントも子供がそうするように首を上げて二人を見ながら、特にレグラスを指さして、
「ワシらドワーフには手を握る習慣は無いが、そちらの少年の戦いぶりは楽しく見させてもらったよ」
と言い、しばらく無言でレグラスを観察した後に先を続けた。
「まだまだ、型に捕らわれておるようだが。
相手がいかなる攻撃を繰り出そうとまったく動じず、構えを乱さずに戦わねばならぬ」
もう何ヶ月前になるだろう。ファズに決闘を申し込み、破れたあ

の時にも言われた事を思い出した。
あの時に比べればいくつもの苦難を乗り越え、成長してきたと思っていたレグラスだったが、剣の腕が証明するようにまだまだ何も変わっていないのだ。
「忠告感謝します、ガントさん」
レグラスはその言葉に剣術だけでなく、生きる上で全ての事への忠告をもらった事への感謝の気持ちをこめた。
すると、ガントは腰から木製の斧のような物を取り出しながら言う。
「『百を考えるよりも一をこなせ』とも言う。片手間にこんなものを作っておいた甲斐があったわ」
そして、その木製の斧を持って壁から離れた人のいない場所へと歩いていく。――が、レグラスが事態を理解していないことに気付くと振り返って怒鳴った。
「貴様はこの戦場で死にたいのか？死にたくなければワシについてこい」
その後、ドワーフによって厳しい稽古がつけられ、レグラスの一日は過ぎた。
六月二十二日。もうすっかり夏を感じさせる熱い太陽が、慌ただしく動く人々を焦がした一日だった。

＊　＊　＊

逃げ出す民はあらかた逃げ出し、都内が戦の前の落ち着きを見せてきた頃、それを見計らうかのように魔物の軍に動きが見られた。
彼らはグランへの距離と規模とを考慮に入れた際、一番適切と思われる場所――商業都市フィアンに拠点を置いており、フィアンが彼らの手に渡ってからしばらくの間はそこに留まって沈黙を続けていた。
しかし、今朝方密偵の運んだ情報によれば、この軍勢の大半がグ

ランへ向けて進軍を開始したと言うのだ。
その数、五万ほど。密偵によれば空が埋まるほどの悪魔の軍勢だったという。
そして、この軍勢の構成員にはレグラス達の目にした空を飛ぶタイプの魔物だけでなく、翼を持たない地上で行動するタイプの魔物が確認されている他、漆黒の鎧に身を包んだ騎乗兵の部隊を目にしたとの報告もあり、これを聞いたレグラスの脳裏にはあの首無し騎士の姿が浮かんだ。
激しい流れの運命に飲み込まれていて考える暇が無かったが、あのデュラハンに一年後の死を宣告されたことは決して忘れていない。
今は目の前の戦いの大きさに、その事は意識せずに済んでいるが、この戦いが終わってレグラスが生き延びていたら、今度はデュラハンとの戦いが待つことになる。
あの、レグラスが手も足も出なかった騎士が今度は彼の命を奪いに来るのだ。
目の前の戦いで死ぬか、一年後に予言通り死ぬか、気が付けば自分には死がまとわりついてるように見えてならない。
レグラスがそうして今まで心の底に眠らせていた恐怖と再び格闘している間にも話は進み、五万程度と言われた魔物の軍勢に対し、こちらは精鋭揃いとはいえこの敗戦続きの空気を感じて逃げ出した者も多く、二万程度の兵しかいないことを告げた。
「以上が我々の得ている情報だ。もっとも、巷で流れている噂を聞けば今の話には何の価値も無いことが分かるけどな」
それらを語った男は頭をぼりぼりと掻きながら言う。
ボサボサで白髪交じりの茶色の髪に、ただ伸びるままにしているといった風の髭、そして一度見たら忘れない浅黒い肌のこの男は東軍傭兵部隊隊長であり、また国王の側近中の側近として活動しているかつての英雄、ダイムだった。
敵軍が行動を開始したことによる開戦間近の報を受け、ここグランの城下町では盛大な宴が催されていた。

町中のあらゆる飲食店を開け放ち、そのすべてにある限りの酒を運び込み、兵士達は最後の晩餐を楽しむのだ。
レグラスとファズもまた、トーレスとガントの二人に無理矢理連れられ、滅多に飲むことのない酒を大量に飲まされそうになっていたのだが、そこへ丁度通りかかったダイム隊長がレグラスとファズに声をかけ、三人で新たなテーブルに着くことになったのだ。
初めて会った時に二人が魔物と戦った時の話を聞きたいと彼が言ったのは社交辞令などではなく本心だったようで、ダイムは様々な質問をぶつけてきた。
二人は恐縮しながらも、少しだけ入った酒の酔いもあって今までの冒険から得た敵の知識を色々と話していった。
また、フィアンでの戦闘経験があるトーレスやガントから聞いた話も同時に話すことになり、彼らは魔物を相手に優勢で戦っていたが、一群の騎兵小隊が現れた途端に旗色が悪くなり、こうしてグランにまで退いてきたらしいことなどを話した。
ダイムはそれらの話を興味深げにふんふんと聞いたあと、「情報提供のお礼ってわけじゃ無いが」と、彼らの手にある最新の情報を二人に話したのだ。
彼自身が言うようにそれらの情報は噂よりは正確で信憑性があるとはいえ、内容は大差ないものであった。
だが、いくら気さくな傭兵部隊長とはいえ、上部の機密情報をそうそう漏らすはずが無く、今の話はそういった噂が流れていることも踏まえて話してもよいと判断したのであろうから、仕方ないことではある。
「こんなところだな。それでは、私は他の部下達にも挨拶してくるよ」
情報交換が終わると、ダイムは返事も待たずに席を離れていった。
隊長として部下の状態を把握したり、今後の作戦を考えたりなど、きっとレグラスには想像も付かないほど苦労は多いのだろう。
そんな中、二人のためにわざわざ時間を割いてくれたこの隊長に

レグラスは非常に好感を抱いていた。
彼のように部下を大事に扱う将校が、あと何人この王国にいるか。現実に見たわけではないとはいえ決して多くないことは想像に足る。
「ダイム隊長は、部下の心を掴むのがうまいみたいだな」
素直な感想なのか皮肉なのかは分からないが、ファズがぼそっと呟いた。
しばらくして、二人が元のテーブルに帰ってくると、トーレスが呆れたように話しかけてきた。
「お前ら、あのダイム隊長に声をかけられるなんて、一体どんな連中なんだあ？」
彼が話すところによれば、ダイムは傭兵界の中では救国の英雄というよりも百戦錬磨の伝説の傭兵として有名であり、このあたりで活動する全ての傭兵の憧れだという。
そんなダイムの下で働けるというだけでもトーレスは感激しているというのに、レグラスのような田舎騎士が彼に直接声をかけられるとは信じられないことだったのだ。
もっとも、ファズに対してはその技量や貴族の一員らしいという情報からダイムに声をかけられるのも無理は無いことは分かっているらしく、レグラスに対しては驚き、ファズに対してはその顔の広さを皮肉っているようでもあった。
このファズは、レグラスがパールに破れたあの日に同じく彼に挑み、見事勝利している。
また別の日にはトーレスとも模擬試合を展開し、勝負は付かなかったもののトーレスに「実戦ならば俺が死んでいる」とまで言わせた。
また一方でパールとの一件以来行動を共にしているトーレスだが、彼の姿を見た傭兵達が何かとレグラスに話しかけてくることが多く、何事かと聞いてみれば、
「『怒りの大熊』といえばこのあたりで傭兵稼業やってる奴ならみんな知ってるよ。

あれだけ腕の立つ男もそうそういないぜ」
とのことだった。
図体が大きくて目立つ事を除けばどんな局面でも最高の活躍をしているらしく――もっとも、その人目を引く図体も手柄を己の元に引き寄せる武器となっていたが――、弓から斧までありとあらゆる武器を使いこなせる傭兵の鏡のような存在だという。
その話を本人の前でファズが話したところ、トーレスは豪快に笑っていたが、ガントは話題に上らなかったことを不満そうにしていた。
そして、そんなトーレスと互角に渡り合えるパールやファズも今や間違いなく凄腕の傭兵であり、この凄腕パーティの事は瞬く間に傭兵中に広まっている。
レグラスとガントは常に影で二人で訓練を続けているために、この三人の噂からは離れた位置にいたが、ガント曰く、
「トーレスなどワシにとっては赤子のような、もの。そのワシが稽古を付けてやっているのだから貴様は今に奴らよりも強くなる」
とのことらしく、不安ではあるがあの三人に並ぶことは不可能では無さそうだ。
実を言うと、パールに勝ち、トーレスに認められたファズに対してレグラスは再び嫉妬のような感情を抱いている。
地方騎士団がまだ健在であった頃にファズと訓練を重ねた結果、彼とはほとんど互角と言っていいほどの勝負ができるようになった。そして魔物達と戦っていく中で、自分は完全にファズに肩を並べるまでの腕前を手に入れたと思っていたのだ。
だが、現実を見れば、ただファズや魔物の戦法に慣れただけで、未知の敵に対しては全く通用していない。
結局の所、レグラスのやっていることは型どおりに過ぎず、応用が全く出来ていないのだ。
そんなレグラスの心理を見透かしているかのようにガントはあらゆる状況、あらゆる手段を想定した稽古を付け、おかげで多くの場

面での行動が判断できるようなったように感じられてきたが、それを他の相手に試す間もなく開戦間近の報が伝わり、今に至っているというわけだ。
このレグラスの全てを見抜いているかのように見える師匠、ガントは特に騒ぐこともなく、トーレスの隣で静かに酒を飲んでいた。
どうやら彼が酒を静かに飲むのはいつものことのようで、それを熟知しているトーレスはレグラスとファズを話し相手に選ぼうとしたのだ。
しかし、二人がダイムに呼ばれてしまったのでその目論見は失敗し、パールに全ての災厄が降りかかることになったようだ。
今、哀れなサソリ男は机に突っ伏して眠っている。
その周囲に転がっている酒の瓶は尋常な量ではない。彼も彼で誘われると断れない性質なんだろう。
そんな事情もあり、テーブルへ戻ってきたレグラスとファズの二人にはパールの代わりに付き合えと言わんばかりにトーレスから酒が振る舞われた。
「オイ、オイッ、そこのねえちゃん、こっちへ来いよ」
突然トーレスが叫んで手を大きく振る。彼の周りにもまた大量の酒瓶が転がっており、真っ赤な顔を見るまでもなく相当酔っていることが分かる。
彼の視線の先には黒のローブを着込んだ、ブロンズ色の髪の遠目にも美女と分かる女性がいた。その女性はトーレスの呼ぶ声に気付いたか、こちらへ向かって歩いてくる。さらに女性の後から神官衣を来た冴えない中年の親父が付いてきた。
「ああ、リーフルにラウンさんじゃない、ははは、久しぶりだね」
酒の二杯程度でもはやすっかり酔っぱらったファズが二人に気付いて声をかける。この傍目に完璧な男もどうやら酒には弱いらしい。
「こちらに居るとお聞きして挨拶に来ました。
皆さんのことは私の部隊でも噂になっていますよ」
リーフルはほんのり上気した顔で、やけに嬉しそうに話す。

普段と様子が違うように見えるのは彼女も酒が入っているせいだろうか。
「私の部隊では噂はおろか今夜の宴の話すら入ってこぬわ。
酒は百薬の長、おまけに今夜は戦の前の宴だ。聖職者だろうと参加を自粛する理由がどこにある」
ラウンはいつも以上に豪快な口を叩いているが、彼は元から赤ら顔なので酔っているのかどうか判別しづらい。
「オーイ、なんだよ、そのねえちゃんも神官様もお前らの知り合いか。本当に得体の知れない奴らだな」
トーレスはこの偶然にすっかり呆れた様子で言う。
もっとも、リーフルが思わず声を掛けたくなるほどの美女は確かであったし、彼女達が二人の騎士に会いにここへ来た事もまた確かなので、このような展開になったことは必然であったともいえる。
「そんなに呆れても仕方がないですよ。今夜ぐらいは脇役でもいいじゃないですか、『怒りの大熊』さん」
リーフルはトーレスにそう言うとくすくすと笑う。どうやら彼女は間違いなく酔っぱらっているようだ。
「こちらが噂のアンドロスコーピオンですね。可愛い」
今度はパールを指さして言う。
サソリの下半身をうまく捻らせて椅子に座っている様は可愛いといえば可愛い、滑稽といえば滑稽だが。
「ファズさんの噂も聞いています。なんでも十人の傭兵をたったの三十秒で倒したとか」
「えぇ！？」
まったく根も葉もない嘘である。
リーフルの暴走は止まらなかったが、それよりも彼女の口から語られる尾ひれの付いた噂の数々に一行は驚いたり、笑ったりしたのであった。しかし、その多くが決して彼女の酒の上の創作ではなく、実際に彼女の周りで囁かれていた事実には不気味なものがあった。
やがて、彼女の語る嘘は少しの創作を交えてテーブルからテーブ

ル、酒場から酒場、部隊から部隊へと広まり、ファズは百年に一度の騎士、パールは異国を救った英雄、トーレスはその巨体故に国を追われたどこかの王子、挙げ句の果てにレグラスとガントに至ってはこの三人に腕を見込まれた田舎騎士と武器整備係ということになっていた。

早々に潰れたパールの他、張本人のリーフルやファズといった何人かの主要人物が戦線を離脱した後も、ますます話は膨れあがり、一同をたたえる声は止むことがなかった。

レグラスは他の仲間との扱いの差に悔しさを感じずにはいられなかったのと同時に、こうして彼女の周りで囁かれるであろう噂に一層の尾ひれが付くことには不気味さを越えて恐怖を覚えていた。

＊　＊　＊

敵軍がグラン周辺に布陣したのは翌日、六月二十九日の夕方頃の事であった。

敵軍は勢力を三つに分け、それぞれを各城門へ対応させるように布陣させている。

グランの四隅にある塔に立つ見張りの報告によれば、敵の布陣は王国軍の読み通りに東門を狙うに適した位置になされたという。

この日の朝から騎士部隊に加え、傭兵部隊にも城壁周辺の偵察命令が出され、交代で見張りに当たっているが、東門には幾度か敵軍の偵察部隊のような小部隊が現れ、その都度大半が塔の弩砲か騎士や傭兵達の弓の餌食となって倒されている。

相手は数に物を言わせて小部隊を各所に送り込み、一匹でも逃げ帰らせて情報を得るつもりなのだろうが、近づく敵のほとんど、それも情報を得るほどに深入りした敵はその全てを討ち取っており、いやがおうにも士気が高まる。

交代を終えて休憩に入った傭兵達が自慢げに戦果を話している光

景も段々と多く見られるようになってきた。
「これが敵の意図なら、いくらかマズいかもしれん」
トーレスが言う。
「勝利に驕った奴らほど単純な罠にかかりやすくなるからな」
彼の言わんとすることは、敵は敢えて偵察の魔物部隊を捨て駒にし、こちらに魔物は弱いというイメージを与えているということである。
そして、いざ刃を合わせた時にそれが間違いであったと気付いても、もはやそれは遅いのだ。魔法でいくらでも生み出せる命だからこその作戦である。
それから数時間が過ぎ、レグラスが夕食を終えた頃に緊急召集令がかかった。
南門側と東門側に位置していた敵軍がそれぞれ進軍を開始したというのだ。
王国軍が対抗のために取った戦術は、弓を持たせた傭兵を二列に城壁の上に並べ、矢を放っては前後を交代するという実に単純なものであった。
城壁にはその程度の前後幅はあるので、特に混雑することもなく整列が行われ、空中の魔物に対する備えを固めた。
またその城壁の上には最新軍備である投石機も数台運び込まれており、これらは階下の城壁内部からの射撃と合わせて地上の魔物への備えとした。
それらの配備が終わってから一時間程、夜眼にも慣れてきた頃に敵軍は姿を現した。
暗闇に月明かりを浴びて怪しげな色に輝く魔物の群れは、空中、地上共におぞましい数が居ることが容易に見て取れる。たとえ月が陰っていたところで、進軍による大音量の羽音と足音によって同様の情報を得ることができただろう。
「とうとう来たみたいだね」
「ああ」

レグラスとファズも弓の扱いぐらいは心得ているため、この作戦で最も重要となる対空部隊へと参加していた。
同様にトーレスもこの部隊に参加しているが、パールはその体型上陣形移動に難があるとして現在東軍本部にて待機している。
また、ガントはドワーフとしての技巧を買われ、投石機の整備や使用といった分野を他のドワーフ傭兵と共に任されている。
魔術師部隊は城壁の内側で待機しており、神官部隊は今は仕事も無く、衛生班として本部で待機しているそうだ。
ようやく先行している敵軍の空中部隊が射程距離に入りそうだという辺りで「構え」と号令が飛ぶ。レグラスは矢をつがえた弓を引く。と、一呼吸置いてから「放て」との声が響き、号令に従いその手を離す。
放たれた無数の矢は緩やかな弧を描きながら魔物へと次々に突き刺さった。
間髪を入れず、射程ギリギリから放たれた北東の塔からの弩砲が魔物の群れへ噛み付く。
さらに、城壁の弓兵は前後列を交代し、隙をほとんど作らずに第二矢が放たれる。
魔物達は城壁に近づくまでに大量の矢を浴びせられ、翼をもつ敵の何体かはそのまま地上へと墜落する。
だが、ここで誤算があったのは魔物の驚異的なまでの生命力を無視していたことだ。
魔物達は細い矢が何本突き立ったところで大きな痛手とはせずに突き進んでくる。
さらに、矢の届かない距離にまで飛翔していた魔物も多く、結果的に大半の魔物が上空から城壁内に侵入しようとしていた。
「空からの襲撃になんて、対応できるはずがなかったんだ……」
レグラスが呟く。かつて翼を持った軍団が人間に牙を剥いた事例など無いのだ。適切な処置を取れるとは思えない。
空から飛来した魔物達は空中で二軍に別れ、半分は城壁へ、残り

の半分は城壁内の町へと向かって降下を始める。
だが、東軍総指揮官のダイムはこのあたりまではなんとか予想の範疇だったのだろう、すぐさま城壁内の魔術師達と神官部隊、待機中の傭兵を集めてこれに対応する。
ほどなくして城壁では乱戦、町では対空戦が繰り広げられることとなった。城壁の上には身軽な動作が可能な傭兵や騎士ばかりが揃えられていたせいもあり、ここに飛来した魔物達は次々と討ち取られていく。
レグラスも弓を捨てて抜刀し、もはや戦い慣れたこの相手を一体ずつ確実に仕留めていった。
相手の数も多いが、こちらの数もそれに十分対応できるほどの数がある。
城下町の方はやや兵数が少ないが、王国魔術学院所属の有能な魔術師達やグランドール神殿の神官達が揃っている以上、遠距離戦では圧倒的に有利とも言える。
ダイムは初めこれらの勢力を温存するために後方に置いていたのだが、背に腹は替えられないのか、彼らに攻撃命令を下した。
まず、魔術師部隊の第一陣が戒めの糸の魔法を唱え、さらにそれをごく威力の弱い気弾で空中へと飛ばす。
戒めの糸も気弾も初歩の魔法であり、特に気弾の魔法はあらゆる呪文と組み合わせて使われている。
例えば、炎の魔法と気弾を組み合わせれば一直線に飛ぶ火の玉――ファイアボールの魔法――ができあがるといったところだ。
この気弾の魔法は初歩であるが故に奥が深く、高位の魔術師ともなると追尾や軌道指定などの様々な応用を効かせる事もできるらしい。
気という純粋なエネルギーの発現は、これひとつで魔術師の実力をはかることができる程だと言われている。
とにかく、そうして産まれた相手に向かって飛ぶ戒めの糸――スパイダーウェブの魔法は魔物達に絡みつき、その身体から自由を奪

う。
羽ばたくことの出来ない魔物達はそのまま地面へと墜落し、神官部隊による浄化の神聖魔法で跡形もなく姿を消す。
この時なんとか体勢を立て直した魔物も、遠くは魔術師部隊の第二陣に攻撃魔法の直撃を喰らい、近くは待機していた傭兵の餌食となって命を失った。
この戦術を取ることによってダイムは魔術師部隊の第一陣だけでも消耗を抑え、後の戦いに備えようとしたのだ。

城壁の上での戦いも相変わらず続いており、レグラスは三体目の魔物と戦っていた。
この乱戦では周囲一体に目をやっておかなければ思わぬ方向から新手が現れ、不覚をとることになる。
初めての実戦でそんな乱戦の危険を知り、メリアでの戦いでは散々鍛え上げられたために、レグラスはこの状況下でも落ち着いて周囲を見渡しながら戦うことが出来た。
城壁の外ではようやくそこまで辿り着いた魔物の歩兵達が城壁に取り付こうとしているが、城壁内部の騎士達による応戦のために膠着状態に陥っているようだ。
目の前の魔物が腕を振り上げる。隙だらけのようであるが、この胴へ斬りつければ魔物は腕を振り下ろし、接近したレグラスを切り裂くだろう。ドワーフの言葉で言う「肉を切らせて骨を断つ」では無いが、生命力の強さを武器にした捨て身の攻撃を取っているのだ。
「貴様の攻撃など、すでに見えている」
レグラスは他の戦士達がそうしているように雄叫びを挙げながら魔物の右真横へと回り込み、その片腕へと斬りつけた。
刃を魔物の骨へと当てると、まるで大岩を斬りつけたかのような振動がレグラスの腕に跳ね返り、その一瞬後には魔物の片腕は切断されて断片は宙を舞っていた。
片腕を失った魔物はそれでも動揺すること無く、レグラスの正面

へと振り向き様に残った片腕を振り回す。
その攻撃すらを読んでいたレグラスは向かってくるその腕をも同様に料理する。
もはや大事な武器を失った魔物は、その牙と体当たりで戦おうとするが、その捨て身の攻撃はよほど油断した相手にぐらいしか通用しないだろう。
レグラスの放った突きは魔物の口から後頭部にかけてを綺麗に貫いた。魔物ごと大きく剣を振るって遠心力で魔物を引き離すと、胸へとどめの一撃を食らわせる。
ここまでしてようやくこの魔物は動きを止めるのだ。
次の相手を捜すべく、レグラスが周囲を見渡すと、戦場に何か異変が起きているのが分かった。
敵軍が全て撤退の構えを見せているのだ。
相手の攻撃を振りほどいた周囲の魔物は例の捨て身の攻撃をかけるようなことはせず、そのまま羽ばたいて舞い上がると後退していく。
翼を折られて撤退することのできない魔物は、手段こそ例の捨て身の攻撃ではあったが、他の魔物を助けるためにその力を尽くし、そのまま散っていっているようだ。
レグラスはこの時初めて魔物の軍勢が組織的な行動を見せているところを見た。
城壁内からも大量の魔物が撤退してきているらしく、空が不気味な黒に染まる。
地上からの攻め手はこの様子を見ると、同様に退却を始めたが、その時城壁の上で声が挙がった。
「今だ、放て！」
誰のものかは分からないその太い声を合図に、それまで沈黙を続けていた投石機が次々と弾を放った。
投石機から放たれた石は大きく弧を描くと退却しかけていた地上部隊の真ん中に直撃し、直撃した敵から将棋倒しに何体かを押し潰

した。
空中からの襲撃に乱戦と、これまで活躍を見せられずにいた投石部隊が、ようやくその力を発揮した瞬間でもあった。
城壁からの追撃と合わせ、挟み撃ちのような形になった魔物達は混乱し、続いて弓を取り直した城壁の上の戦士達からの攻撃によって次々と数を減らしていった。

戦果はかなりのものであった。
敗走する魔物達の姿は遠目にも今朝王都へと向かってきた時と比べて大幅に減っていることが分かる。
敵影が完全に視界の彼方に消えると、城壁で待機していた戦士達は偵察の兵を残して意気揚々と本部へと戻っていった。
「意外と大したことは無かったな」
騎士達が談笑する声が聞こえる。確かに、レグラスにとってもも今の戦闘はあまりに呆気なく感じられた。
魔物達個々の実力は今までのそれと何ら変わりの無いものであったが、メリアでの戦闘を思い出す限り、数に物を言わせて突入する事も可能だったのではないか。
それを敢えて行わず、適当なところで軍を引いたということは、やはりフイアンの情報屋が言っていたように、物を言わせるだけの数が無くなってきているのだろうか。
そうだとすれば、この戦には十分な勝機があると考えてもいいのかもしれない。
グランは勝利する。
勝利に驕った兵ほど脆弱なものは無い。そう分かってはいてもレグラスの心の底から沸き上がってくる勝利の喜びは抑える事が出来なかった。
これは、レグラスにとっては初めての勝利だったのだ。
「よくやったな。今の内にしっかり休養を取っておけ」
本部内で合流したトーレスが言う。彼の体中には黒く染みついた

大量の血の跡があり、今の間に相当数の相手と戦った事が伺える。
その後聞いたところによると、この戦いで受けた損害は東門・南門合わせて騎士一名と傭兵二名の全三名だけであったらしい。
そのうち二人は重傷ではあるが命を取り留め、一人の傭兵は神官の祈りにより、立って歩けるほどに快復しているという。
一方で相手に与えた損害はレグラスだけでも三匹の魔物を倒した事や撤退時の様子から分かるようにかなりの成果で、南門でも同じく相手の半数近くを討ち取ったという。
さすが、これまでの戦いを経て生き残ってきた傭兵達に、王都を預かる戦士達といったところだろうか。
その損害の大きさを示すかのようにその日は続けて相手が攻めてくる事は無かった。

＊　＊　＊

夜が明けた。
六月三十日。今日も早朝から魔物の小部隊が何度も現れ、傭兵達は忙しく駆り出されていた。
「昨日と違ってあの部隊は俺達に見つかるとすぐ逃げだし始めた。少数の兵で王国軍全体を混乱させようとしてるんだよ」
ファズがパンを頬張りながら言う。
レグラスとたった今見張りの任務を終えたファズの二人は東軍本部の建物近くのちょっと洒落た料理店で遅い朝食を取っている。
王都グランでは戦時中ということもあり、軍部の活動拠点周辺にある多くの料理店が兵士達のために店を開放していた。
籠城戦のために食料庫は完全に軍が管理しているが、こうして開放している店にはいくらかの配給があり、今日もレグラス達は朝食を味わう事が出来る。
王国軍は相手の作戦に対し、偵察の数を増やして小部隊を確実に仕留めていく事で対応していた。

レグラス達に取っては任務に就く時間が少し早く回ってくるだけで、特に混乱する様子はなく、むしろ一小隊を仕留めたという報告が入るたびに士気は高揚していた。
「さすがの魔物軍もグランの団結力にはかなわないようだな」
レグラスはそう答えるとパンを口に放り込む。いちごのジャムはあまり好きではないが、空腹よりはマシなので我慢して食べる。嫌な酸っぱさが口に広がり、やわらかなパンの布団がやさしく味を中和する。
ガントに言わせれば「腹が減っては戦争はできん」といったところだ。
ドワーフの一族にはさまざまなことわざが伝わっているそうだ。人間同士のさまざまな争いなどを間近に見続けた結果、そういったことわざが産まれたのかもしれない。
彼らのことわざは日常的な部分から兵法に関わる事まであらゆる分野に精通しており、思わず納得してしまうものが多い。
そんなことわざ博士のガントは今、トーレスと共に偵察に出ていてここにはいない。
そういえば、あの二人はどのように知り合ったのか、表向きには罵り合いながらも、なぜあれだけ互いに信頼し合えているのか。
彼との稽古の際に、彼がいかにトーレスを信頼しているか、またその逆も真であることは彼の話から聞くまでもなく伝わってきたが、それが何故かは改めて聞いた事がなかった。
今度の戦いが終わったら聞いてみよう。
レグラスは、この戦いが終わるのはもう時間の問題だと確信していた。

いくらかの時間をおいて現れた小勢の魔物軍は、そのどれもが撃退されていくうちに段々と出現間隔が空き、昼を過ぎた頃からはまったく姿を現さなくなった。
魔物の軍はもはや小部隊を送るほどの余裕がないほど数が減って

いるとしか思えず、王国軍の識はますます高揚した。
この戦況を見た騎士達を中心に出戦を望む声が挙がったが、東軍総指揮官のダイムを初めとして各軍の指揮官は誰も首を縦に振らなかった。
そうして一日の熱も頂点を過ぎ、兵士達の我慢が限界に近づいていた頃、東門で偵察をしていた騎士達が魔物の大軍の接近を知らせた。
その報が入るや否や東軍はすぐにこれに対応し、昨日と同じように兵を配置した。
ただ、昨日とは違い城門の上にほとんどの勢力を集めるのではなく、町の側にも傭兵を分散して配置した。昨日の戦いから、侵入を阻止するよりも侵入させてから内部で討った方が確実に相手を仕留める事が出来ると判断したからだ。
守るための構えではなく、おびき寄せて逃さないための構えへと変化したことになる。
城壁の上には少数精鋭で実力のある傭兵ばかりを置き、余った傭兵達と騎士部隊は城壁の内側に置かれることとなった。
「フン、ワシをこちら側に置くとはあの隊長も何も分かっていないようだな」
ガントが毒づいた。毒づいた相手は、いまや彼の教え子であるレグラスである。
トーレスやファズの影に隠れて目立つ事の無かった二人は精鋭に選ばれることなく、城壁の下で警護をすることになったのだ。
もちろん、これはダイム隊長の非ではなく、傭兵や騎士達の推薦を参考に決められた配置であるから仕方のない事だ。
その上、ガントに至っては投石部隊で、戦士としての戦果はそれほど上げておらず、その部隊が縮小したとあってはこの位置にいることはそれほど不思議でも無かった。
ただ、ここで幸運だったのは、城壁の内側にもともと配置されていた魔術師部隊と神官部隊に所属していた二人――リーフルとラウ

ンとは行動を共に出来る事だった。
「ファズ君がいないのが残念だな」
レグラスと再会したラウンが、リーフルと視線を交わしながら惜しげに呟いた。
「ファズなら一人でも戦えますよ」
レグラスは嫉妬混じりに答えた。
そう、彼は自分より何倍も強いのだ。たとえ戦場に一人残されても不覚を取る事は無いだろう。
ラウンに話を聞くところ、昨日の戦いで魔術師が絡め取って神官が仕留めるという攻撃手段をとっていた二つの部隊は、その作戦のために魔術師と神官の二人一組で行動する事になっていた。その時から二人は共に行動していたらしい。
今度の作戦ではそこへさらに傭兵達が加わった事になるから、そちらのコンビとも一緒に行動するのはどうかと誘われたレグラスはガントに同意を求める事もせず、二つ返事で了解した。
ガントは何も相談されなかった事に一瞬不快感を表したが、この二人と共に行動する事を否定する理由は無いためか、すぐに二人と挨拶を交わした。
二人とガントは先日の晩餐の際に会っているはずだが、終始静かに飲んでいたせいかトーレスやパールの影に隠れて記憶にあまり残っていなかったらしい。
おまけにその時は酔っていたせいもあって、ほとんど初対面のような会話が始まった。
「ドワーフって、本当に樽のような体をしているんですね」
リーフルがくすくすと笑いながら言う。それからしばらく、レグラスは陰でガントの愚痴を延々と聞かされる羽目になった。
「さて、そろそろ無駄口叩いてる暇は無くなってきたようだの」
何十分経ったのだろうか。ガントは突然そう言って肩に担いでいた長い槍を構える姿勢を見せた。

城壁ではなく、こちらの部隊に配属されたと知った時に彼は「この方がここでは取り回しやすい」と、この槍を持ち出してきたのだ。
トーレスの身長ほどもあるその槍を人間の子供ほどの身長しかないガントが担いでいる様は滑稽であるが、彼がその槍を下手な人間以上に使いこなせる事をレグラスは身に染みて知っている。
ガントによる訓練カリキュラムにはあらゆる武器による戦いが含まれていた。
その一つに、槍による戦いというものも当然含まれており、ガントはどこからか槍を調達してくると刃先を安全に加工し、訓練に使った。
彼が訓練のために使う模擬武器にはいつも驚かされたが、その武器から彼が繰り出す技の数々にはさらに驚かされていた。
特に驚かされたのがこの槍の取り回しで、自分の身長を遥かに超える槍をまるで体の一部かのように操る彼の姿には驚きを通り越して一種の戦士としての感動のようなものすら覚えていた。
そんなガントが槍を構えた先にある、トーレスやファズのいる城壁の上では、魔物の軍の接近に対し弓で応戦を始めていた。城壁に遮られて外の様子は分からないが、空を見上げる限り相手の攻め方は昨日と同じだ。
「レグラス殿にガント殿ではないか」
突然背後の低い位置から声が聞こえた。驚いて振り向くと、そこにはアンドロスコーピオンのパールが立っている。
「拙者、伝令を伝えに回っているのである」
パールはどうやら伝令係として働いているらしい。
伝令の内容は魔物が城壁内に侵入したら各個撃破しろという事のみであった。戦術も何もあったものではないが、昨日の戦いもそういった形で成功を収めていたらしい。
また、パールは各グループの調査もしていたらしく、レグラスとガント、リーフルとラウンの４人が同時行動している事も確認すると簡単な戦況を伝えてその場を後にした。

その説明によると、敵軍は空中部隊が先行して城壁に取り付き、その攻撃を引き付けている間に地上部隊に攻城させるという昨日と変わらない戦術を取っているらしい。
ただ、目の前の様子を見ていると昨日とは違い、空中部隊は潜入を目的としておらず、全勢力を城壁側に集中しているようだ。
一旦は槍を構えたガントもその展開にはガッカリした様子で槍を下ろす。
さすがに相手も考えているらしく、内部に備えがある事を察知して下手に攻め込むよりも城壁を攻略する事を優先したのだろう。
だが、城壁部隊は数は少なくとも精鋭揃いで決して昨日と比べて能力的に劣るものでは無い。攻め入った敵は確実に一体ずつ葬られていく。
「ワシらの出番は無いが、今度も勝ち戦で終われそうだの」
ガントは渋々満足したといった感じで言う。
丁度この頃、王国軍上層部で急な作戦会議の招集があったらしく、ダイムが席を外し、東軍の指揮は名も知らぬ騎士部隊の隊長の近衛騎士が代わりで執っていた。
会議の内容は不明だが、何か大変な事が起こったようで伝令を聞いた途端ダイムは血相を変えて城へと向かっていったという。その近衛騎士はダイムの指示が的確だったせいで特に仕事も無く、戦況を聞くたびに、まるで何か競技を観戦する客のごとく喜びに体を震わせているそうだ。
この勝ち具合ならばおそらく敵は全滅か、またも撤退するしか後がないだろう。その時はその代理隊長もさぞかし喜ぶに違いない。
そう思いながらレグラスは遠目に城壁の様子を眺めていると、予想通り劣勢となった魔物達は撤退を始めた。
そこで手空きになった傭兵達は敵の地上部隊へ向けて投石機を動かす。
昨日の教訓から、投石機には専用の部隊を充てず、その時々で使える者が稼働させる事になっていた。これも城壁部隊が精鋭揃いで、

こうした判断を任せられたからこそである。
投石機は一台が魔物の攻撃によって壊れて動かなかったが、残り二台が役割を果たし、地上部隊は引き際を突かれてまたも混乱に陥った。
「同じ罠に二度もかかるとは、阿呆としか言いようのない敵だな」
ラウンがさすがに呆れたと言わんばかりに呟く。
「いや、そういうわけでは無かろうて」
ガントが答える。と同時に、本部付近から叫びながら馬を走らせてくる者があった。
「今だ、追撃しろッ」
男は東軍総指揮官代理の近衛騎士だった。ここで株をあげておこうとでも思ったか、あるいは完璧な勝利を期待したのか、とにかく彼の独断で行動したのだろう。
「あの若造が、早まりおったな」
ガントが忌々しげに毒づいた。ダイム隊長がくれぐれも慎重になれと伝えていたことは先程のパールの説明にもあったとおりだ。
しかし、周囲の騎士や傭兵達は勝利の雄叫びを挙げて追撃の用意に入っていた。そこへパールが血相を変えて走り込んでくる。
「駄目だ。あの騎士が、ダイム隊長の忠告を無視したばかりに」
息を切らしながら言う。
周囲では追撃へ向かう騎士と、数人の伝令が追撃をやめろと叫んでいる。
「西軍で……、裏切りが出ている」
息も絶え絶えにパールが言う。
「裏切り？　まさか。
寝返る意味が無いじゃないですか」
レグラスは答える。どう見ても相手の不利にしか見えないこの状態で反乱を起こすメリットがあるとは思えない。
「貴様は戦争というものを分かっておらんようだな。
いかに劣勢であろうとも、一つの綻びを突けば十分に勝機はある

というものだ」
そう言うとガントは槍を構え直して続けた。
「この戦争は負けだ。ワシらに出来る事は、あの門を抜けて逃げ出す事だけだの。
運が良ければ命は助かるかもしれんわ」
ガント曰く、まずは追撃が問題だという。彼はフイアンの戦で魔物軍の本隊である騎士隊を目にしているが、それが今度の戦ではまったく表に出てきていない。
そこにまるで相手の追撃を誘うかのような攻めをしたということは、追撃のために開門したらその本隊によって逆にこちらの戦力が大幅に削がれる可能性がある。
そして、ここに集まる敗残兵達は、出戦となれば必ずや先の雪辱のために前へ前へと進むだろう。
また、フイアンでは敵の騎士隊は魔物に紛れて戦っていたという。弱いが数の多い魔物を取り付かせ、それを倒したときには騎士が懐へ入り込んでいるという寸法だ。
開門によって乱戦状態になれば、まさに敵の思うつぼである。
さらに、この裏切りだ。
追撃のために開門してさえいなければまだ門を背にして戦う事は出来ただろうが、この状況では完全に東軍が挟み撃ちされた形になる。
おまけに、裏切りが示し合わされた物だとすれば、これを合図に外の軍が一気に攻勢に出てくる事は間違いない。
たとえ追撃が無かったとしても苦しい戦いになったに違いないだろうということだ。
これだけ都合良く事が運んだあたり、代理の隊長もまた裏切り者であったか、さらにダイム隊長の離席すら敵の計略に含まれているのではないか、とまで予測した。
「そ、そんな……」
レグラスはその話を聞いてまるで心臓が貫かれたかのような気が

した。
これが戦争というものなのか。
先程までの勝ち戦など無かった事――いや、今までも勝ち戦などではなく、敵に踊らされていただけに過ぎないというのだ。
この戦に勝機が無いとすれば、レグラスの祖国グランドール王国は歴史から姿を消してしまう事になる。
レグラスは力無く肩を落とした。今まで味わったどれよりも辛い屈辱、敗北感だ。失う物が大きすぎる。
「レグラス君、落ち込んでいる暇は無いようだぞ」
ラウンに声をかけられ、我に返る。そして、城壁の反対側――西軍や南軍のいた城下町の方からこちらへと迫る大軍を目にした。
それらが決して味方ではなく、自分たちに害を為す存在である事は考えるまでもなく分かった。
「アンデッドですね」
リーフルが呟き、ラウンが大きく頷く。その大軍の兵はどれも常人では考えられない程の傷を負っており、肉は愚か骨まで覗かせている者までもいる。
暗黒神や、魔法の力によって操り人形となった死体――ゾンビであった。
ゾンビはまさに操り人形のような珍妙な動きでレグラス達に迫ってきている。
「奴らの動きは遅い。このまま逃げるのが得策だ」
ラウンがそう言ってレグラスを見る。また自分が闇雲に敵の中へ突っ込んでいくのではないかと心配しているのだ。
「だが、もう逃げようにも逃げ道は無いぞえ」
ガントが城門の方を見る。
彼の推測通り、敵の主力の待ち伏せを喰らったようで、城門の向こうでは明らかに押され気味な様子が見て取れる。
また、大半の兵が外へ出てしまっているので、今更閉門したところで目の前のアンデッド集団を撃退できる可能性は低い。

「無駄死にするよりはまだマシだ」
そう言うと、レグラスは奥歯を強く噛んだ。今回ばかりは自分の責任では無いとは言え、最後の戦いをこうした結末で終える事になったのはとても、悔しい。
「北の大山脈へ抜ければなんとかなるやもしれぬが」
パールがぼそっと呟いた。
「馬鹿を言え。あの山脈に立ち入る方が目の前の奴らよりよっぽど危険だと言うに」
ガントがそれに素早く反応する。
「いや、拙者、あの山脈の安全なルートを抜けてここまできたのであるが……」
「やっぱり貴様は馬鹿者じゃ、それを早く言わんか！」
パールが面食らった表情で言葉に詰まる。
「そうと決まればさっさと逃げ出すのが一番だの」
ドワーフは言うや否や城門へ向けて走り出した。
その後からパール、リーフル、ラウンと続く。
「く、くそお！！」
レグラスは無意識に叫ぶと剣の柄を握り直し、一行の後を追って走り出した。

＊　＊　＊

東軍は完全に乱戦状態に陥り、魔物の軍は後方に温存していた大部隊を全て動かし、またも数に物を言わせる作戦に出ていた。
十分に訓練を積んだ騎士や百戦錬磨の傭兵でも四方八方を敵に囲まれれば太刀打ちできない事もある。今の戦場はまさにそんな状態であった。
追撃に出た兵達は数で大幅に勝る魔物達に周囲を囲まれる形になり、なお数の余る魔物達は城門から城下町へと侵攻しかけている。
「この野郎ッ」

「神のご加護！」
あちこちから決死の兵達の雄叫びが聞こえる。
レグラス達がガントを先頭に城門へ近づくと、丁度魔物達が門をくぐって城門内へ侵入してきたところだった。
周囲にまだ残っていた騎士達も集まり、戦闘状態になる。
レグラス、パール、ガントはそれぞれ距離を置いて前線に立ち、リーフルとラウンが後方から援護する。
魔物の数は多く、それぞれ二体や三体を同時に相手し、倒していくが、それでもなお前に進む事が出来ない。
そんな時、魔物達の真横――城門の中から大剣を振り回して突進してくる男がいた。
「モタモタしてたらまずいんじゃないのか？」
魔物達の不意を付いて血路を開いてくれたその男――トーレスはレグラス達に向かって叫んだ。彼はそのまま目の前の魔物を相手にしながら続ける。
「上の奴らはほとんど表に出ちまった。残りは少ないが、逃げるには十分だろうよ」
その言葉を合図にしたか、何十人かの傭兵達がトーレスの開いた通路を埋めるように現れ、一歩一歩足を進めるたびに周囲には敵の死体が積み上がり、さらに新たな通路を開いていく。
「良いところだけ持っていきおるわ」
ガントは呟くと手にした槍を大きく振り回した。周囲に群がっていた魔物達が弾き飛ばされる。
この援軍のお陰で、侵入しかけていた魔物は総崩れとなり、レグラス達はようやく城門から外に出る事が出来た。
城門の外では想像以上の激しい乱戦が行われていた。騎士の鎧に傭兵達の姿、それに大量の魔物と、所々で真っ黒な鎧に身を固めた騎士の姿が見える。
「やはり、あの騎士隊が出てきおったか」

ガントが叫んだ。
「邪悪な波動を感じます」
「魔物といい先程のアンデッドといい、敵は一体何者なのか……」
リーフルとラウンも思わず呟く。
「死にたくなければ、奴らの動きには注意しておくんだな」
トーレスは叫びながら目の前の魔物に斬りかかった。魔物は肩から腰にかけて斜めに切断される。
レグラス達も後に続いて目の前の敵を倒し、道を文字通り切り開く。
だが、敵は正面だけではない。戦闘の中心部を離れるように移動しているとはいえ、依然敵の数は多く、いつしか一行は敵に囲まれる形になっていた。
どれだけ離れても敵の数がまったく減る気配がない上、負け戦との意識があるせいか、段々と疲れも目立ってくる。
レグラスも相手の攻撃をいくつか交わし損ねて傷を負っていた。
腕や足に刻まれた傷は彼の動きを鈍らせ、新たな傷を作る原因にもなってしまう。
――体が重い。
城門を出てから何十体目かになる目の前の敵の攻撃を間一髪で交わしながら、レグラスは限界が近い事を感じる。
重い腕を振り上げ、魔物の腕めがけて一撃を加えるが、その攻撃は相手の腕を断ち切るまでには及ばず肉に食い込む。
まずいと思った時には遅かった。魔物は深々と刃の刺さった腕を振り上げるとその反動を利用して反対側の腕でレグラスのがら空きの胴を狙う。
彼は失敗に気付いた途端に全力で後ろへ跳躍して直撃だけは免れたが、鎧の隙間を魔物の鋭い爪がかすっていった。
ひやりと気持ちの悪い汗が吹き出るのを感じると同時に身体を襲う痛みでバランスを失い、倒れる体を誰かが支える。
「落ち着け。すぐ回復の神聖魔法をかける」

既に退魔の神聖魔法などを多用したのだろう、レグラスを抱きとめたラウンはかなりの疲労を見せていた。
たった今レグラスの脇腹をえぐった魔物はガントの槍とリーフルの魔法によって既に息絶えている。
「ファズ君も無事ならいいのだが」
次の敵へ向けて魔法を放ったリーフルがラウンの言葉に一瞬振り返る。メリアを後にした四人の仲間のうち、彼だけがここにはいない。
やがて、レグラスは暖かい光の熱を感じたかと思うと傷はふさがり、同時に今までの激しい疲労も体から消えていった。
ようやく立ち上がったレグラスに対してラウンは腰を落とす。疲労が限界に達したのだろう。
「ラウンさん、ありがとうございます」
レグラスは言うと、ラウンは疲労の色がありありと見える顔を上げて言った。
「そういうときは、もっと気の利いたセリフを言うものだ」
そこへ新たな魔物が現れた。
配置はうずくまるラウンの前にレグラス、さらにその前方にガント、トーレスの2人が展開しており、ラウンより後ろではパールが戦い、それをリーフルが援護している。
そこへ、右後方からパールとリーフルの攻撃をうまく交わして魔物がレグラスの元へ回り込んだという訳だ。
レグラスはその魔物を難無く仕留める。両腕を落とし、脳天に一撃を食らわす。その戦い方はいつかのデュラハンのようにスマートだ。
その魔物を倒すとほとんど同時だっただろうか、すぐ背後でラウンが何か声を上げたのを耳に振り向いた彼は思わず嗚咽の声を挙げた。
いつの間にか、今の魔物が来た場所とは逆方向の死角から敵が回り込んでいたのだ。

普通の魔物ならば今のラウンでもなんとか対処する事が出来ただろう。しかし、相手が悪かった。
全身を漆黒の鎧で固めた騎士はラウンの心臓を貫いた剣を抜き取ると、呆然とするレグラスに向かって疾風の如き突きを放った。
恐怖で声も出せないレグラスに金属と金属がぶつかる嫌な音が聞こえ、目の前が真っ暗になった。
「不可抗力だ。俺がもう少し周りを見ていれば」
悲痛な叫びを挙げたトーレスが「くそ！」と敵を罵った。レグラスのすぐ目の前に立っている。
後方の異常を感じたトーレスはすぐにレグラスの元に向かい、手にした大剣で黒騎士の剣を横から払ったのだ。
そして、彼はすぐに体勢を立て直した敵と激しいつばぜり合いを繰り広げていた。
しかし、どうやら力ではトーレスに分があったと見え、劣勢を自覚した黒騎士は大きく後ろに飛んで間合いを広げると、構えを直してからトーレスに斬りかかる。
その攻撃は素早く、洗練された騎士のそれと言った感じであった。レグラスの見た限り、その技の冴えはメリアで見たロンバルト団長のそれに負けずとも劣らない。
一方のトーレスも手にした武器が大剣とは思えないぐらいの動きで相手の攻撃を確実に受け流している。
だが、まったく攻勢に移れていないところを見ると苦戦している事が分かる。
ふと我に返り、呆然と見ているだけで何もしていない自分に気付いたレグラスは再び進路を開くために雄叫びをあげて魔物の群れへ向かって行く。
トーレスはしばらく相手の攻撃を受け流すと、先程相手がそうしたように大きく後ろに飛び退いて叫んだ。
「こいつは亡霊騎士だ、パールに魔法の嬢ちゃん、援護しろッ」
叫び終えない内に黒騎士は一気に距離を詰めてくる。

――亡霊騎士。後ろから聞こえたその単語にレグラスは聞き覚えが無かった。
名前から察する限り幽霊そのものなのか、先程のゾンビのように魔法の力で生み出された者なのか。
この状況から考えればおそらく後者であろうが。そういえばデュラハンも幽霊だとか言われていたが……。
目の前の敵に集中しなければならないのに、多くの考えが浮かんでは消えていく、
後方ではパールとリーフルが加勢したらしく、剣のぶつかる音が一層大きく響いてくる。
「もはや脱出どころじゃ無いようだの」

いつの間にか近づいたガントがレグラスに向かって叫ぶ。
「トーレス達にこの雑魚が近づかないように護衛しておけ」
そして、自身はパールとトーレスの援護に気を取られて孤立しているリーフルの護衛へと走る。
残念なことに、その判断が少し遅かったようで、既にリーフルは魔物に囲まれていた。
彼女も自身のミスにようやく気付いたようで、慌てて逃げ場を探す。
しかし前方には亡霊騎士、それ以外の方向には扇状に魔物という現状で逃げるに逃げられず、立ち往生してしまった。
ガントがそこへ向かって走るも間に合わず、リーフルへと一体の魔物の爪が襲いかかる。
だが、魔物の腕が振り下ろされたと思いきや、その腕は身体を離れて宙を舞った。それと同時に空中から降り立った何かがゆっくりと立ち上がりざまに言った。
「ほら、正義の味方は遅れてやってくるって言うだろ？」
魔物の一匹を踏み台にリーフルの包囲網の中へ入った男は、続けて周囲の魔物達を華麗に倒していった。

蛇が草むらの中を駆け抜けるように、ファズの剣が魔物達を切り裂いていく。
助けに向かっていたガントはこの援軍に安堵するが、その直後横から走り込む亡霊騎士に気付く。
ガントは亡霊騎士の攻撃を槍で受け流すが、槍は脆くも折れてしまい、勢い余って亡霊騎士の剣がガントの肩へと食い込む。
「ガントさん、大丈夫ですか！」
この戦闘に気付いたファズが直ちに加勢に入る。
「なんの、これしき。――それより奴を」
とは言うもののガントの傷は深く、肩から胸までに達しておりどこから見ても致命傷だ。
リーフルが何かを叫び、ファズは亡霊騎士の攻撃のいくつかを剣で受けると、相手の攻撃を絡め取るように刃を走らせそのまま相手の脇へと攻撃をたたき込む。
金属と金属がこすれる激しい音がし、亡霊騎士の片腕が飛んだ。
片腕を根本から切断されて大きく仰け反った亡霊騎士の首元にファズが渾身の突きを喰らわす。
首を刎ねられた亡霊騎士はそのままがっくりと倒れ込んで動かなくなった。
亡霊騎士を倒したファズは青白い光が消えていく剣を下ろすと、すぐにガントに駆け寄り、声をかける。
しかし、ガントがファズの声に答える事はもう無かった。
この戦闘のためにファズとリーフルはレグラス達から遠く離れてしまい、やがて周囲を囲む魔物によって互いにその姿を見失ってしまう。
ガントの遺体をそっと地面に下ろしたファズはうろ覚えの最後の祈りを捧げると、リーフルの手を取り、その目を見つめて言った。
「大丈夫、絶対守ってあげるからね」

＊　＊　＊

レグラスがいくら叫んでも、三人の姿が向こうから現れる事は無かった。
「今は、先へ進むしか無いだろう」
トーレスがレグラスの肩を叩く。トーレスとパールの連携、それにリーフルによる剣への魔法付与によって見事亡霊騎士は倒したが、この戦いの合間にその援護を行ったリーフルとガント、加勢に現れたファズの姿を敵の中に見失っていた。
ラウンも亡霊騎士の一撃によって既に絶命しており、レグラスはトーレスの鎧の襟元を掴んでまで反対したが、結局遺体はその場に放置し、逃げることを選んだ。

一気に数を減らした一行だったが、皮肉にも目立ちにくくなったために包囲網は和らぎ、しばらく走るうちに敵の数もまばらになり、目の前に大山脈の麓から続く大森林が見えるようになった。
草陰に身を隠し、レグラスは戦場を振り返る。今だあちこちで戦闘が続いているらしく、それを示すように至る所から砂煙が上がっている。
「この森には、いくつかの抜け道が存在するのであるが……」
パールとトーレスが今後について話し合っているのが聞こえる。レグラスには目の前の光景も、その話し合いも全てどこか遠い世界の出来事のように感じられていた。
夢の中のデュラハンの言葉が思い出される。
「貴様には、誰も救えない――」
まったくその通りだ。今まで自分がどんなことをしてきたのだというのだ。
負けに負けを重ね、仲間のほとんども失ってしまった。
冷静に考えればその全てが自分のせいでないことぐらいは判断できただろう。
しかし、今のレグラスには全ての事、何もかもが自分のせいであ

るかのように思われた。
自分の情けなさがただ悔しく、膝を落として地面に倒れ込む。瞼の奥からは熱い物が溢れ出る。
「ちくしょう、――俺は、俺は……」
涙声でレグラスが叫ぶ。考えれば考えるほど悔しさが腹の底からこみ上げていく。
「うわぁぁぁァァァ！！」
レグラスは地面に拳を叩き付けた。何度も叩き付けるうちに、拳が血で滲む。それでも悔しさは収まらない。何度も、何度も地面を叩く。そこにこの過酷な運命を定めた神を見ているかのように。
――と、その腕が誰かに掴まれる。
「そのくらいにしておくんだな」
トーレスはそのままレグラスの腕を引っ張り、立ち上がらせる。
「ひとまず、森の奥へ進む」
レグラスが自分の力で立てる事を確認するとトーレスは手を離し、そのまま背を向けて歩き出した。
「もうすぐ日も暮れる。安全な野営地を見付けておかないと苦しむのは自分だぞ」

＊　＊　＊

木々の間から漏れる夜明けの光を手がかりに道ならぬ道を歩いていくと、森から抜けた。
そこは、切り立った崖の上らしく、数歩先で地面が途切れて無くなっていた。そのおかげで、遥か彼方にある戦場の様子を見渡すことが出来る。
ほんの数時間前には、自分もあの場所で戦っていたのだ。
戦いの行く末はもう見えている。もう、どうすることもできない。仲間達の多くとは散り散りになってしまった。彼らは無事生き延び

ることができているだろうか。
同じ戦場で共に戦った仲間達の姿が脳裏に浮かんでは消えていく――。

ふと気付くと、歌を口ずさんでいた。今まさに歴史から消えようとしている、愛する祖国の歌を。

そうして彼方の地上を見つめていると、いつしか戦闘は収まっていたようだ。様子を見る限り、予想に違わない結末だったのだろう。これからは新たな歴史が始まるのである。

――いや、あの平和な国を歴史から消してしまって良いはずが無い。たとえ国が消えても、その国を愛する心はまだ残っている。その心は決して消え去ることは無いだろう。

崖の上に一人の騎士がいる。

まだ真新しい鎧を身につけた、どこか田舎臭い顔立ちだが騎士らしい凛とした雰囲気を持つ男だ。崖の奥の森では、彼の、もう随分と数の減ってしまった同行者達が彼を見守っている。
騎士は遥か遠くに見える母国を、涙を浮かべた目でじっと睨みつけながら呟いた。

「力が、欲しい」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2102c/

グランドール戦記I ひとつの終わりと始まり

2010年10月8日15時27分発行